

アジアと女性解放

Asian Women's Liberation

アジアの女たちの会

連絡先：
東京都渋谷区桜丘町14-10渋谷コープ211号 400円

光州一周年によせて



光州の倒れた者へ捧ぐ

——わたしの中の韓国民主化斗争——

富山 妙子

恨と抵抗の詩人

金学鉉

韓国・日本人として考える

安江良介

政治犯の家族たち

李小仙さんたちは今も戦う

ともに歩き、ともに声をあげ

——私たちの運動から——

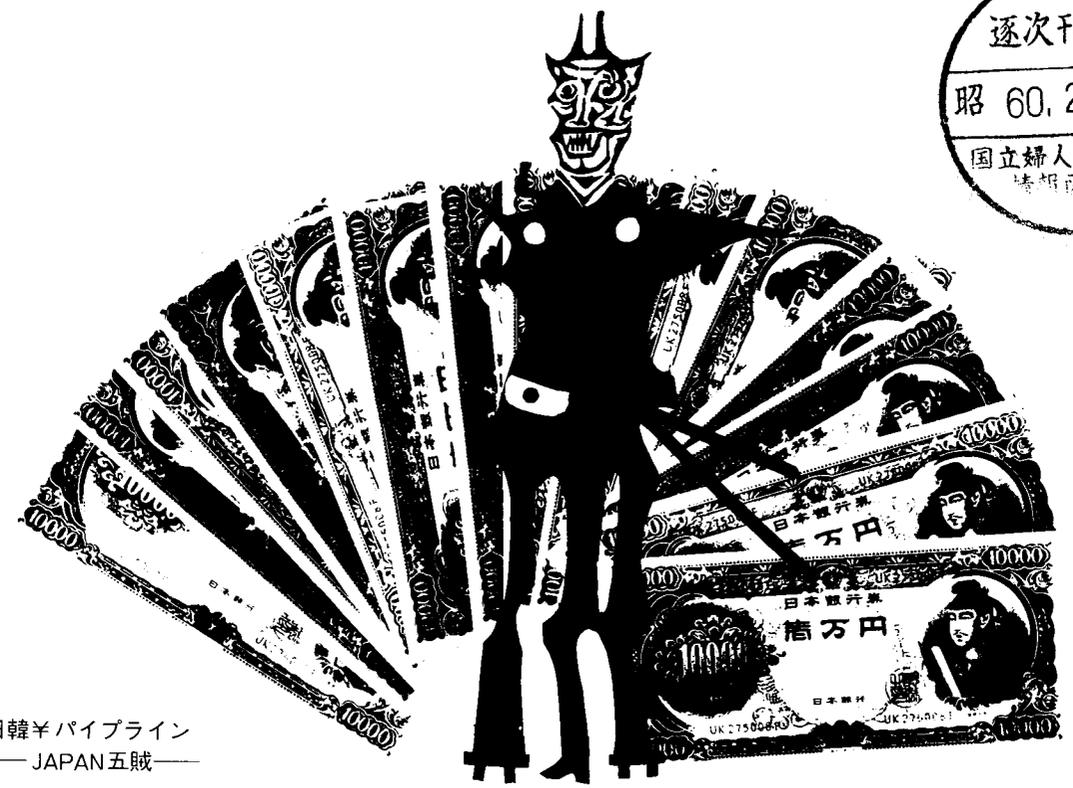
買春観光反対 東南アジアの女性たちも……

No.10

1981.4

絵・富山 妙子

女性差別・民族抑圧からの解放をめざして！



日韓¥パイプライン
— JAPAN五賊 —

1980年5月、戒厳令撤廃を叫び、自由をもとめて立ち上った光州市民らの蜂起は、全斗煥將軍のひきいる戒厳軍によって圧殺されてしまった。そして、全斗煥將軍は大統領に就任——その全政權をレーガン大統領はいち早く承認した。アメリカにならって日本政府も全政權との「日韓関係修復」を急ぎ、そしてこの一年、韓国には、あいついで大型ミッションが派遣され、政財界の要人が往来した。日本政府は1月末には、凍結していた190億円の対韓円借款の調印を行なった。また観光地化することを私たちが憂えていた済州島に今度は、核廃棄物の再処理工場ができるという。日本の政・財界にとっては、何よりも「韓国の政治的安定」が最大の関心であり、朴政權下の高度成長政策がそのまま引きつがれることが緊急の課題なのである。民衆が金大中氏らに自由を！と熱い思いをよせたのうらはらに、冷たい鉄のような、日・韓・米、協力体制が強化されている。

けれども、東学革命や、日帝下での3・1独立運動、あるいは4・19革命から、独裁政權下での民主化闘争とつながる韓国民衆の抵抗の精神は、どんなにきびしい時代にもけっして絶えることなく地下水脈となって流れている。その水脈を吸い上げる根っこ（プリパ）はやがて朝鮮半島全土をおおっていくであろう。

日本の女たちがこれに連帯するみちはどこにあるのか。経済大国・軍事大国化を拒否し、分断の固定化をはかる日本の体制に立ち向う戦いをたゆみなく続けてゆくことではないだろうか。

光州の死者たちの死を空しくしないために、光州の血を舐りある種子とかえてゆくために、私たちはこの号を光州1周年の記念号として韓国民衆に捧げる。

1981年4月 アジアの女たちの会

光州の倒れた者へ捧ぐ

富山 妙子



わが胸底に疼くもの

「アカシアの旅大へ！」「冬の松花江・ハルビンへの旅！」——中国旅行を勧誘する旅行社の宣伝がまいこんでくるたびに、私の心のなかで葛藤がはじまる。

行きたい、ほんとうに行きたい。私は少女時代をすごした懐しい大連や、ハルビン——しかし郷愁などではどうていすまされない、戦時下の記憶がうかびあがり、私の胸底で痛く疼きはじめる。

あの日はよく晴れた冬の日だった——一九三七年（昭和十三年）十二月「南京陥落祝賀式典」の日、私たちハルビン女学校の生徒たちは関東軍司令部の閲兵をうけ軍樂隊を先頭に小中、女学生や愛国国防婦人会の行列がつづく。手に手に日の丸の旗をもち、万歳、万歳を叫びながら目ぬきの大通りを行進する私たち日本人の姿を、いったい中国人たちはどんな思いで見たであろうか。そのころ南京では二〇万人とも四

〇万人ともいう中国人の大虐殺が行われていた。ある一群はケロシン油を浴びせられて火ダルマになり、あ

る群は機銃掃射をうけ、女たちは強姦され殺された——揚子江の下関棧橋は血で染まったという。

あのころハルビン駅にあった「伊藤博文受難碑」——朝鮮の植民地化をおしすすめた伊藤博文は一九〇九年、ハルビン駅で朝鮮人義士安重根に狙撃された。そうした土地柄、女学校では朝鮮人生徒に対してとくに目を光らせていた。

当時ハルビン女学校は皇民化政策で約一割ほどの朝鮮人の入学を認めていた。しかし彼女たちは創氏改名で日本人姓に変えさせられる——そんななかで日本人姓になることを頑強に拒否しつづけた少女、李さんがいた。

そのうえ李さんは制服のスカート丈さえきびしい学校に朝鮮服を着て登校した。先生にとがめられると彼女は「制服は洗濯に出しました」と答える——そのため彼女への風あた

りはとくに強かった。

戦火のなかの女たち

一九七〇年秋、私は韓国を旅し、二十数年ぶりで李さんに再会した。李さんはハルビン女学校時代の朝鮮人の同期生六人をさそって私の宿にかけつけ、それから十日間ほど、彼女たちひとりひとりがその経てきた人生を語りあかした——いまソウルにいる六人のうち五人までが朝鮮動乱で夫を失ったという。

彼女たちは女学校時代の朝鮮人差別の屈辱や、宮城遷葬や神社参拝の苦痛について語る。やっと日本の敗戦により独立した母国に帰国——結婚して子どもが生まれた。そこへ再び一九五〇年の朝鮮戦争がはじまった。大國の介入により戦争は拡大し、ソウルは連日げげしい空襲にさらされた。Aさんの両親も家も爆弾で吹き飛んだ。

空襲がはげしくなると彼女たちは幼児を抱え、夫を探しもとめ、飢えた難民となって各地をさすらった。

その朝鮮半島空襲の米軍爆撃機は日本を基地として飛び立ち、爆弾の雨を降らせていた。地上は阿鼻地獄となり、百万人の朝鮮民族が殺され三千万人が家族離散したという——この朝鮮動乱を日本では「朝鮮ブーム」とよび、戦後の不況を一息に取りもどし経済成長の基礎を築いたのだった。

それにくらべ朝鮮民族は南北に分断されたまま、別れた家族の生死さえもたしかめることはできなかった。李さんたちは夫の生死も確認できないまま二十数年の歳月が流れた。「貞女二夫にまみえず」の儒教倫理が彼女たちを縛り、さらに姑や舅の世話をしながら孤閨を守ってきた。彼女たちは行商や仕立物をしながら生計を支え、いまでは美容院や洋服店をしながら子どもたちの成長だけが希望だという。

Bさんの夫が日本で生きていることがわかり、東京にかけつけてみると、夫はすでに別な女性と家庭をもっていた。もしや夫は北にいるので

はなからうか——」だが「北」は彼女たちにとって、地球上でもっとも遙かなる遠い国となっていた。

「なまじつか生死をたしかめない方がよい。どうせ夫は別の女と暮しているのだから……」とCさんはいう。李さんが私にたずねた。

「教頭のS先生どうしておられる。ずいぶん私はいじめられた。あまり朝鮮人をバカにするのでくやくして、冬の目下駄箱をあけて先生の靴にそつと雪をつめたことがあるのよ」

そのS先生は戦後九州に引揚げて校長を歴任し、そのご北九州教育委員長になり、紫綬褒章だかの勲章を授与されたことを私が語ると、彼女たちは絶句した。

「ひどい——日本は変わってはいないのね。またこのごろ日本人がいっぱいやってくる。しかも女めあてにくるのよ。恐いことだわ……」

彼女たちの眼は怒りにぎらぎら燃えていた。「どうして私たち朝鮮人の女はこんな悲しい目にあうの——」彼女たちの眼から涙があふれ出た。

血のあとにそつて

韓国に旅した翌七一年九月、私はあるきっかけから再びソウルにゆき、西大門刑務所で獄中で火傷をうけてまもない徐勝君に面会した。

彼の火傷のあとはまだ生まなまし

になつていたのだ。深夜と思つてい

るうちにいつしか夜あけは近づいて

いたのだろうか。

独裁者の死とともに朴政権を支え

てきた維新残党は既得権維持の内紛

をひろげ、政権を支える権力装置は

麻痺した。

一九八〇年五月、大きな波のうね

りのように戒厳令撤廃と民主化を叫

く、顔は腫れ、唇の形はなく、片方の耳は焼けちぢれ、手は焼けぼつくりのように黒く焦げていた——その焼けただれた青年の姿をいつそ強烈に私の心に焼きつけたのは、そのころ出たばかりの金芝河の詩集『黄土』であった。

黄土の道に鮮やかな

血潮の跡 血潮の跡にそつて

私はゆく 父よ

いまは黒ぐろと陽のみ燃ゆるとこ

ろ……

日本の支配下で抗し、捕えられ、殺されていった血の跡はいまもなお

つづいていて。逮捕投獄の恫喝にさらされながら「血潮のあと」につづいてゆく学生たちや、投獄も辞さず

命がけで詩をかく詩人、金芝河の鮮烈な精神が、泰平ムードの日本の中でねぼけていた私にとって大きな衝撃だった。

いったい絵画とは何であつたか。裕福な生活の上に咲く、美しい花なのか——この線は美しい、この色は

みごとだと称讃される消極的な愛玩物なのか。それとも受けとつた側に

何らかの人間変革を引きおこし、実践や行動へとかり立ててゆく、解放

への「火種」だろうか。

なんの理由もなく女子学生が殺された。それに抗議した老人が刺し殺された。負傷した学生を治療していた

光州キリスト教病院に乱入した軍は重傷者を窓から投げ捨てた——のど

かな光州は阿鼻地獄と化していった。五月二一日、学生と市民は武器を

とつた。恐ろしい地獄を見た光州市民の怒りは「死のうろ 殺せよ」と

いう激しいことばとなって八〇万光州市民のうち、二〇万人のデモが軍

に迫っていた。立ち上つた市民の結集の前に戒厳軍は力を失つた。

金芝河の詩のメッセージは私の心に点火された「火種」であつた。金芝河の詩をテーマとして私が絵をかきはじめた七一年から、韓国の政治状況は激動の道をたどつていた。

七二年四月、金芝河は『五賊』につづく諷刺詩『蜚語』を発表してふたび逮捕。その年の十二月には『維新憲法』が公布され、朴政権の独裁体制を強化した。しかし弾圧を強めるほど、それに抗する民主勢力の激しい闘いが始まつていった。

七三年には「改憲請願百万人署名」の高まりとそれに対する弾圧。七四年学生運動拒殺のための「民青学連事件」では多くの学生たちとともに

金芝河も逮捕されてしまった。同年七月、金芝河に死刑の求刑——しかし日本をはじめ国際世論のもり上りで無期懲役に減刑。

七五年「民青学連事件」逮捕者は「人革党」関係者を残し、金芝河も釈放された。しかし金芝河は獄中記『苦行一九七四』を『東亜日報』に掲載し、「人革党」が当局のデッチ上げであることを告発、ふたたび逮捕されてしまった。そして四月八日

「人革党」八名の入びとが処刑——日本政府は韓国政府に抗議するどころか、二三四億の借款援助をあたえ、

朴政権強化に手を貸してきた。「人革党」事件で処刑された妻たち

う強権を発動。五月二七日未明より空と陸からの総攻撃を開始——新兵器で重武装した戒厳軍は戦車と装甲

車を先頭に、まるで敵国に進撃するように光州めがけておしよせた。

重武装した軍の攻撃をうけ、学生と市民の決死の反撃も三時間の戦闘

で力が尽きてしまった。学生たちは軍隊に足蹴りにされ、銃床で殴られ

逮捕されていった。街上には殺された青年の鮮血が流れ、なかには十代の少年もまじつていた。光州の死者

は二千名ともいわれる。光州の学生たちがつぎつぎと逮捕

されていくニュースを胸のつぶれる思いで見守つていた——ふたたび私は光州の絵を描こう。そして昨年の

六月中旬から二週間ほどで一息に制作したのが『倒れた者への祈祷』——一九八〇年五月・光州』である。

いくどか涙を流しながら私は絵を描いた。描いているうちに光州の死者たちの魂は雨粒の水粒になつたように思われてきた——ちょうど梅雨の雨だれをみていて、「やがて雨粒は岩を砕くだろう」といった成錫憲

のことばが思い出された。そうだ——光州の死者たちの魂は雨粒になつたのだ——そしてその雨はやがて岩を打ち砕くだろう。そしてその雨は乾いた大地を蘇生させ、そしてまたつぎの種子をはぐくむだ

の深い悲しみの手記が日本にとどいてきた。「人革党」の無実を訴えたためにふたたび金芝河は投獄された。なんとという夜の闇の深さだろう。それにしても私たち日本人はつねに韓国の入びとを犠牲にしなからうすばけたネオンの灯をともしてきた。昨日も、今日も。

「人革党」妻たちの悲しみを思い、処刑された入びとへのレクイエムとして、また金芝河の釈放をねがい、「深夜」と題して私はリトグラフの制作をはじめた——これがのちにスライド「しばられた手の祈り」のもとになった作品である。

一九八〇年五月の光州

韓国のことに私がかかわるようになってからいつしか十年がすぎてしまった。思えば徐勝、俊植君は十年のあいだ、その青春を獄中に閉じこめられたままだった。金芝河も入獄と出獄をくり返しながら七〇年代の大半を獄中ですごしてきた。

七九年春から私は金芝河の作品『蜚語・六穴砲崇拜』の制作にとりかかっていった。エピソードに骸骨になつた大王の踊りをつけ加えた——そこへ朴大統領狙撃事件。民主化闘争

の力は釜山、馬山の蜂起から韓国全域に波及し、かつて李承晩政権を倒した「四・一九革命」のような状況

ろう。遠くから、金大中事件に連座し、内乱陰謀・戒厳令違反に問われ、求刑

懲役二〇年、判決十五年の刑をうけた詩人・高銀の最終陳述の声がきこえてくる。

私が望むことは、一生を牢獄ですごすことである。私はいつさい

の社会的欲求を捨てたい。そして時の移りゆくままに、牢獄で死を迎えたい。わが国民は受難の民である。私はこの民に加わりたい。

光州事態の死者に敬意を表する。私のこの赤い囚人番号章をカーネーションの花と見立てて、光州の死者にこの花を献げる。

一九八〇年九月二三日

軍法会議での最終陳述



恨と抵抗の詩人たち

金学鉉

はらからよ

私は西方浄土に行こうとは思いません
死んでも 死んでも この国にいるつもりです
死んで からだは土となり
水と風になるだろうが

私の魂は荒ぶる鬼神となつて

この国の山河にいるつもりです
いままで生きるに家なくさまようこともありません
死ねばこの国全体が家なのです

栄山江の川辺をさまよひ
行けなかつた大同江牡丹峰をもさまよいつつ
悲しい百の人の涙となり
深夜の酒となつて

わが抑圧者の腹の中に入るつもりです
この国に生まれてくる時は
他国に住もうと生まれたではありません

一つの苦しみは多くの苦しみに
ともに苦しみ ともに愛し
この国の千の月光の下 生きて

はらからよ

私は西方浄土には行きません

高銀氏は「金大中氏事件」で10年の刑を受け、大邱の獄中にある。



詩人・高銀について

詩人・高銀やその他の獄中の文学者を思う時、私は過去の植民地時代の詩人たち、一九四四年、北京の監獄で四一才で死んだ李陸史(イ・ユクサ)や、解放の半年前、一九四五年福岡刑務所で死んだ尹東柱(ユン・ドンチュ)のことを思い浮べる。この人々のあり方と、今日、一九八〇年代、七〇年代における我が国の文学者のあり方は何ら変っていない。民族といわず、「韓国文学」というのもいいのに、我々があえて「民族文学」という時そこには歴史的な観点がある。我が国では、近代の目覚めとともに、外勢による侵略と植民地支配が始まった。その中で主権を奪われた民族の抵抗の炎を燃やしたのは、詩人、文学者のみではなく、労働者・農民たちでもあった。そうした民族の恨(ハン)と抵抗の中で、戦いの中から我が国の文学は生れた。こうした受難の文学の命脈はいままで続くのか。

植民地の時代はさておき、解放後六〇年代には作家の南廷賢らが投獄されている。七〇年代は、七〇年五月、雑誌「思想界」に発表した詩「五賊」による金芝河の拘束で幕を開けたが、その後も、「十章の歴史的研究」を発表した金明植、現在また獄中に

でよと説いた近代詩人で仏僧の韓龍雲(ハン・ヨンウン)につながる。高銀は、「詩人における四・一九革命」と題する講演の中で、「世界・一九七八・七」こう語っている。

私の一生にとって最も悲しいことの一つは、一九六〇年の四・一九革命の時、ソウル世宗路の現場でそれを目撃することができなかったことです。

と。どの国でもそうだろうが、四月革命になった途端に、多くの詩人たちが、あたかも、自分たちがその革命をなしたかのような詩を次々と書いた。彼は、こうした革命讃歌に対して、きびしい自己批判をこめて批判している。

若い人々が血まみれになって死んでいった現場に詩人の唯一人として居合わせなかつたのです。銃弾に撃たれて倒れた一人の詩人もいません。

しかし、こうした風土の中から、新しい四・一九世代の文学者、金芝河、廉武雄、趙泰一、朴泰洵らが出る。彼らについて高銀は、「彼らの本籍は、全羅道でも黄海道でも慶尚道でもなく、四・一九なのです。歴史の現場、歴史の中の民族の生のみが、彼らの本籍地であります」と語っている。そして彼はこうも語る。

…文学もいまや民族の痛みと真実を、また日帝の残滓と分断の極限を克服して統一される民族への熱意とを、その

課題として目ざすのであります。民族

の分断は病いであり死であります。抒情詩人は、感傷ではなく、民族に、歴史に、全身を投げ出す予言者であるべきだと思います。讚美の人であるよりは、批判の人であることを望み、静かな夜の冥想よりは、真昼の街のまっただ中で血の声を叫ぶことを望みます。

七八年秋の「創作と批評」誌の座談会で、彼は、民族という概念について、「民族の実体を、反独裁、反外勢、反封建の戦いの中で、主体的に確立してゆく過程だ」とらえて「発言している。外勢と内なる外勢の克服、そのためには文学者は歴史意識、政治意識にめざめるべきだと説く。

そして、もうひとつ、分断問題を主題とする文学が、民族統一への大きな役割を果たすべきだと語っている。同じ座談会で、白楽晴(ベク・ナクチョン)もまた、「過去においては、植民地主義の克服が文学のいとなみであったが、今は、民族分断の克服が課題だ」といっている。「文学人として、民族統一という大きな課題に答えてゆかねばならぬ、文学を全民族的な課題としてゆかねばならぬ。そして、我々すべてが文芸復興あるいは文学革命の運動を展開すること

で、創造の衝動が提供されねばならない」。これが七〇年以降の参与派、または歴史意識にめざめた文学者の

考え方である。

四・一九以後、民族文学が論じられたし、市民文学、あるいは農村・農民文学、あるいは労働者文学が論じられた。こうしたものをひっくり返して、「民族文学」とよばれるようになったのは、七〇年以降である。

白頭山の天池に淵源する鴨緑江の流れは普天堡、恵山鎮の上流にいたってはじめて筏が浮かべられるようになる。普天堡といえは、青山里戦闘の名譽で終りをつげた抗日遊撃戦が、普天堡戦闘でふたたび朝鮮独立軍の面貌をとりもどした土地であった。

夜の筏では朝鮮虎の咆哮も聞こえる。いや、どこかの曲り角を通過する時は、朝鮮独立軍と日本軍との豆を炒るような銃声がやかましいこともある。そんな時は筏を岸に着け、死んだように身を隠す。——晩春の筏には解けた氷の塊りに、密輸者、独立軍の死体、あるいは白頭山の毒蛇の死骸、山猫の死骸なども引つかかる。——こうした風景は日帝時代のものだが、その日帝時代の植民地作家たちは鴨緑江の筏舟しや豆満江の黄褐色の水の歴史的風物には目もくれずに生きた。白頭山や鴨

緑江、豆満江岸では、いろはのいの字も知らない少年パウでさえ、早くから民族の歴史的現実を深く認識する力を持つようになり、ついに十六才の少年兵として独立軍に入るのである。そん

ある文益煥、「民衆の声」の作者李錫杓、「冬共和国」の梁性佑のような詩人、「漢陽」事件の作家李浩哲や評論家任軒永、文学者たちの弁護に当たった弁護士で自らも詩や随筆を書く韓勝憲、最近では南民戦事件の詩人金南柱ら、光州事件の金準泰、文炳蘭など、十数人の文学者が、「ことば」を書いたゆえに、獄に入っている。こうした受難の歴史は、日帝の時代と変っていない。

高銀のこと

高銀は、一九五一年僧となつて、十二年間、山で修行し、その間五八年文壇に登場するが、七四年には自由実践文協会の代表幹事となり、七九年には民主主義と民族統一のための国民連合常任幹事として活躍し、獄に入る。彼は「私はなぜ山から下りたか」(一九七八・十二・シアレソリ)の冒頭にこう記している。

「酒を堂々と飲む存分飲む自由のため下りて来た。……わたしはその自由を心ゆくまで味わっている。と。それに続く文の中で、彼は今日の仏教のあり方を批判し、自分は真の仏教を求めて下りて来た……自分が真に成仏するのは南北統一の時だとのべている。こうした彼の考えは「仏教維新論」を著わして、権力者や富めるものと結託した仏教を打破し、町へ出

な少年兵が鴨緑江、豆満江上流に銃弾に倒れた身で投げ出される時、京城の飲屋では、「豆満江の青い流れに棹さす船頭……」の歌が、妓生の嬌声と箸をたたく拍子に合せて優雅に流れていった。——「筏師たちのくらし」高銀

たたかひのなかから

これは決して過去の植民地時代のことだけではない。

植民地の残滓は社会のあらゆる面になお残っている。植民地の克服が文学の課題となつているのは、民族文学が、単なる文学上の営みに止まらず、近代史の中で、はるかな東学農民戦争から、三・一独立運動、四・一九、そして今日まで十余年続いている民主化闘争の中で成長してゆくものであるからだ。

これと同時に、民族文学という時には、民族の主体性の確立が根底になければならない。

フランツ・ファノン「民族文化のために闘う」とは、まず民族の解放のために、すなわち文化を可能ならしめる物質的母胎の解放のために闘うことだ。民衆の闘いの側面に展開される文化闘争など存在しないのだ。たとえばアルジェリアにおいて、フランス植民地主義に対抗して素手で闘うあの手あの手の男たちすべての女たちはアルジェリアの民族文化と

無縁ではない(鈴木道彦ほか訳「地に呪われた者」と語っている。

私はこのことばを読んだ時、あの独立軍の少年兵のことを、そしてまた、解放後の、馬山、ソウル、大邱そして光州で倒れた青年、学生たちのことを思った。民族文学は、闘う人々と無縁ではない。同様に、フランスの植民地支配に対して立ちあがったアルジェリアの人々と、朝鮮の青年たちは決して無縁ではない。

民主化闘争の中で、それこそ多くの労働者や、農民、学生など、無名の人々が虐げられ、病気になる、あるいは獄から出て来ても半身不随になる等、苛酷な目にあつて来た。文学者は、そのような人々の中にいるのである。かつて申東暉(シン・ドノヨプ)はこう歌った。

アルジェリアの黒人村で/カスビ海のほとり 村娘の村で/朝清らかな国、街と街/光化門広場、孝子洞終点で/怒涛のごとく逆巻く 新しい血の柱の抗拒……/冲天する自由への意志……すべての栄光は陽の光りとともに/叫びつつ倒れて行った 幼い戦士の/美しい手の甲に降りそそげ

(阿斯女IIアサニョII)
この詩は馬山、ソウルの無名の人びととアルジェリアの人びとをつなぐものであった。
四・一九の時、大邱でデモの火ぶ

たが切られ、馬山では三月十五日、靴みがきの青年が銃にうたれて亡くなった。その死をいたんで、仲間の少年たちが碑をたてた。それにはこう記されている。

高銀の文中にある少年兵の死は、こうした青年の死の中に持続されているのである。このような民衆の戦いの中にこそ文学の素材はあるし、その中で文学の想像力は生れるのである。

民族の恨

民族文学とは、国粹主義的、排他的な文学ではなく、このような文学の大きな流れではないか。

文学について語る時、純粋と参与ということばがよく用いられるが、純粋といい、芸術至上主義という時それは、社会や政治から目をそらして、ただ文学のための文学のみを求めめることを意味する。こうした純粋文学は、一九三〇年代から盛んになったが、ファシズムの台頭とともに必ずそうした文学が生れる。それに對して、参与の文学、抵抗の文学もまた、三〇年代に始まり、七〇年代に再び盛んになった。参与という場

合、それは現実の生活のいとどなみ、虐げられる農民、労働者、民衆の苦しみから目をそらすことはできないというところから出発している。そして七〇年代の農村及び都市周辺の労働者を描いた作品など、こうした中で民族文学の方向が定まってきたのである。高銀の考え方は「幸福」と題する彼の詩の中にあらわれる。

「夜明けの道」高銀
この詩は彼の「臨終」の詩と共通したものだが、これらの詩をよむと私は尹東柱の詩「十字架」を思い出す。あとを追って来た陽なのに/いま、教会堂のてっぺん/十字架にかかってしまった。

尖頭があんなにも高いのに/どうやってのぼれるのだろうか。
鐘の音も聞えてこないのに/口笛でも吹いてうるついで 苦しかった男/幸福なイエス・キリストのように/十字架が許されるのなら首を差しだし/花のように咲きほころぶ血を/暗闇せまの空の下に/静かに流そう

「十字架」尹東柱一九四一年
彼、尹東柱はキリスト者であり、高銀は仏教徒だが、この詩を合せよむと、民族の詩人の中に一貫して流れるものを感じる。

私は時々、我々の民族はなぜいつまでもこのようなことを言い続けねばならないのか、と悲しくなることがある。なぜみな獄中に入り、金大中氏は生死の危機にさらされるのか。しかし、金大中氏ばかりでなく、高銀やその他の人々の陳述をよむ時、私はその中に、民族の魂をみる思いがする。我が民族は今まで、政治家以上に、文学者や宗教家、政治家によって育まれて来た。

これから、我が国が、民主化され統一にむかうことを、私たちは望むが、韓国の民族文学の目的もまた民族統一にある。それは最終的には第三世界との連帯であることを、白樂晴氏ら文学者ははっきり打ち出している。

韓国の状況と第三世界の状況はあ程度一致している。しかし、日本の民衆の中にも、第三世界的な状況はある。韓国の文学は、この点において世界性をもちうる。民族文学とは、世界に共通するものであると思う。
(一九八二・二二六、真生会館でのアジアの女たちの会主催による講演から。文責・山口)

金芝河と女性解放思想

—神は娼婦の腐った

子宮のなかにおわす—



金芝河は彼の作品『チノギ』の中で女についてこういつている。「女に生まれし女。韓国の女、それも農村の女。学校にも自分の思うよう人れず、物心つくころから年をとって死ぬまで台所にしぼりつけられ、暗い朝まだきから夜ふけまで飯をつくり、あと片つけをし、洗濯をし、子供を生み、手足がまるで熊手になるくらい田畑の作業に追まき、水汲み、運び、掃き、拭き、それでもどうかするとなられ、ぶたれ、訴えるところもなく、声をあげて泣くこともできず、暗い台所の片隅にうずくまり、唇をかみながら声をたてずに泣くしかないそんな女。いつになつたら人間扱いを受けられるでしょう。」

このような女の姿が現在の第三世界の女たちの人生であろう。その農村からさえも、そこで生きてゆけなくなつて、都市の路地裏に住みつくようになった娼婦たちに金芝河は思いを馳せる。それはい

わゆる文学が情緒的に描く娼婦の世界とは次元を異にし、神の存在に至る普遍的な問いとして描いたものである。

金芝河が獄中で構想している未完の作品『張日譚』(チャン・イル・タム)の中で、主人公のチャンは娼婦と白丁(被差別部落出身者)の間に生れた子である。彼は長じて義賊となり、捕われた獄中で彼は他の盗賊たちに革命の思想を教える。

ある日チャンは脱獄して追われる身となり、娼婦たちが住む路地裏にかくまわれ、そこで彼は娼婦にぬかづいていう。

「彼は娼婦たちに「おお、わが母よ」といひながらその足に口づけし、そこで『足の裏が天である』神はまさにあなた方の腐った子宮のなかにおられる。神はどん底におわします。」と宣言する。

いったい神は誰の側に立ってきただろうか—権力者の側にか、豊か

な人びとの側にだろうか。それとも抑圧された人びとの側にだろうか? それなら神は貧しい者虐げられた者の側にいるはずである。

ガンジーはインドのカースト制度の底辺に在る不可触賤民を「神の子(ハリジャン)」とよんだ。解放神学の考えをもつ黒人たちは「神は黒人の側に存在する」そこで「神は黒い」という思想に達した。

金芝河のいう「神は娼婦の腐った子宮の中におわす」という思想は、さらに一歩前進したものであろう。韓国の路地裏で、肉体以外に売るものを持たない娼婦。その娼婦の朽ちゆく腐った子宮の中に神は存在する—このような思想は、抑圧の苦しみを分かちあう中から生まれたものであろう。



韓国・日本人として考える

安江良介

金大中氏らへの大法院判決も近いと憂慮されていた昨年十二月十一日「女たちの会」では、光州・金大中としてわれわれ」と題して、「世界」編集長安江良介氏に講演して頂いた。講演の後半の部分を中心にその内容を紹介する。

朝鮮問題はむずかしいか

朝鮮問題はむずかしいといわれます。しかし、日本人にとって、それは本当にむずかしいのでしょうか。

近代百年の朝鮮の歴史、あるいは解放から三十五年の歴史、一九六〇年の四・一九学生革命から二十年の歴史、そのどの側面をとってみても私たちは多くのことを知るはずですが、いちばん手短かな七〇年代一〇年間をとってみても、朝鮮においてはさまざまな形で、大きな変化がおきています。その前史というべきものは、一九六〇年四月の四・一九学生革命です。この革命では、学生たちが立ちあがってあの李承晩（イ・スンマン）体制を倒しました。その中で一八六人の若い人々が死に、しかし、その死によって、韓国（あるいは朝鮮）民族の歴史において不滅と

もいふべき、すぐれたナシヨナリズムが獲得されました。

李承晩政権の不正選挙に端を発して全国にひろがった抗議のデモは、馬山の一高校生、金朱烈（キム・チュヨル）君の警察の銃弾による死を契機にふくれあがり、四月十九日にはソウルでは一〇万人のデモが行なわれしました。これに対して警察と憲兵隊は無差別に射撃を加えました。

この四・一九学生革命をもたらした李承晩体制は、政治的・軍事的・経済的にあらゆる面で米國に依存し、半鎖國的にアメリカに従属しており、そのイデオロギーは徹底的な反共でした。そのようなギクシャクとした政権はたえず危ないのですが、それと同時に腐敗も進行する。そしてその腐敗や、反民主的なものに対する国民の憤りを、暴力と反日・反共のイデオロギーで押えて来たというこゝとでした。そうした中で、たとえば一九五六年の大統領選挙で、李承晩候補と対立して多数の票を獲得した野党の曹奉岩氏を捕えて死刑にするという事件も起きています。曹奉岩氏は一九五八年北のスパイであると

いうことで裁判にかけられ一番では無罪とされますが、李承晩体制は大いに慌てて、高裁・大法院の判事を入れかえ、大法院で死刑判決が出た一〇数時間後に曹氏は処刑されました。こういうことが二〇年後の今、金大中氏の身の上にくり返されるかもしれないのです。

こうした李承晩体制を倒した学生革命は、韓国の人々に義挙とよばれる、胸をはって誇れるナシヨナリズムの勝利でした。その時、たとえばある父親は、朝鮮日報に別掲（二三頁）のような投書を送っています。

当時、私はこれを読んで深く心を打たれました。この大学は明らかに梨花（イファ）女子大ですが、この大学の学生たちは、五年後の一九六五年の韓日条約反対闘争の時、そして今日もそうですが、朴正熙政権の中でも、たびたび闘争にたちあがっています。そして、ここで娘にこう訴えた実に誠実な父親は、年老いたとはいっても、せいぜい五十五才であれば一九〇五年生れ、六十才であれば一九〇〇年生れぐらいでありましょう。まさに、朝鮮民族が、日本

の支配によって国を滅ぼされてゆく過程に生れ、その中で、少年、青年時代をすごして来た人です。

このような韓国民のナシヨナリズムを、さすがに、その一年後に軍事クーデターで政権をとった朴正熙も否定できませんでした。だから、彼らは、我々は四・一九の義挙の精神を継承するものである、社会が浄化されるならば再び軍隊へ戻り、政治は民政に移管すると約束しました。しかし、彼らはこの約束の履行を求める声に反して、軍政を十八年間続けた。

■朴政権を支えた日本とアメリカ
多くの日本人が朴体制を知ったのは、金大中氏が連れ去られた頃からでありますから、初期の朴政権のことは想像がつきにくいかもしれませんが、一九六一年五・一六クーデターから、六四・五年までの朴政権はきわめて弱いものでした。いろいろな不正やスキャンダルもあり、民政移管をめぐって、在野の政治家との間に激しい争いもありました。韓国のジャーナリズムも軍政を非難しました。こういう弱体の朴政権を強め

たものは、基本的には日本とアメリカであります。

一九六五年は、韓国の解放後の歴史、あるいは朴政権十八年において分水嶺をなす年でした。六五年、朴正熙は二つの選択をしました。ひとつはベトナム戦争への軍の派遣であり、もうひとつは、日韓条約の締結です。六五年二月、アメリカは北爆を開始し、ベトナム戦争に全面的に介入することになりました。しかし、それだけに国際的には孤立し、またそれによって経済は苦しくなり、いわゆるドル危機が起ります。そこで国際的な孤立を免れるために、いくつかの国に参戦を頼みました。そこで最も勇敢に参戦したのが韓国軍であり、その時の將軍の一人が、全斗煥現大統領であります。もうひとつアメリカが行なったことは、ドル危機で苦しくなったため、韓国への経済援助を日本に肩代りしてくれとお願いして来たことです。日韓条約体制の動機はそこにあり、これを推進したのはアメリカでした。

韓国においては、学生、知識人、野党もこの条約反対闘争に立ちあがり、そして朴政権は衛戍令を布いて、軍隊の力で韓日条約を調印せざるを得ませんでした。しかし、アメリカの二つの要請を受け入れたことで、朴政権はアメリカの強い支

持を受け、国際的にも国内的にも安定したものとりました。

たとえば一九六六年には、朴政権が提唱したアジアの反共体制であるASPARCができあがります。また六五年十一月には南ベトナムのグエン・カオ・キ首相が韓国を訪ね、韓国と南ベトナムの友好条約が結ばれます。しかし、こうしてアジアの冷戦体制を最も忠実に受け入れた韓国の選択は、七〇年代の一〇年間にみごとに崩壊しました。

冷戦体制の崩壊

一九七二年の七・四共同声明と南北赤十字会談は、韓国にとっても新しい政策課題となりました。また北朝鮮が国際的な地位を得たこと、特に一九七五年に非同盟会議に参加し、その年の秋の国連総会には北朝鮮がオブザーバーの席をもつことができ

たのは実にいいことであつたと思えます。このことは、六〇年代の極東をきびしく縛っていたアメリカの冷戦構造が、ベトナム戦争の敗北とそれをきっかけとした米中和解によって大きく変化したことを意味します。しかし、それによって、東アジアで米國の冷戦構造の尖兵の役割をしていた国々は、その政権基盤が大きく動揺しました。これは、フィリピン、タイ、韓国もみなそうです。そうした政権の動揺を食いとめる

ためには、政権の自由な交代——国民の意志によって政権を選んでもらうのが一番いいというのが私たちの考えですが、政権をもっているものはそれは考えない、政権にあくまで固執することによって安定を保とうとします。

そこで韓国は一九七二年の一〇月維新体制をしくわけです——冷戦体制が音をたてて崩れていくその瞬間に、冷戦構造を再構築しようというのが維新体制であります。当然そこに民主勢力の反発が起るはずですが、それに対して彼らは暴力による抑圧によって民主勢力の声を圧殺しようとする——これが維新体制の悪循環です。そして、七〇年代の最後に、その悪循環のゆえに自己破壊する。これが朴政権の七九年一〇月二六日の運命でした。

このことは、そのような南朝鮮、韓国とのみ結びつき、しかも韓国の国民とではなく、一政権とのみ結んで来た日本の朝鮮政策が破綻を示したということでもあります。普通に考えるなら、韓国の民主勢力とも日本の政府はパイプをつなぐべきだったと思えますが、そうではなかった。日本の対朝鮮政策は南に対するいびつな肩入れを是正して北に対する対話の道を求めるということができればならなかったのは明らかですが、

日本政府はそうはしなかった。これが七九年一〇月からの事態です。

朝鮮政策を誤らせるもの

韓国の国内において、朝鮮半島全体において、さらにまた日本の朝鮮政策において、我々がどうすべきか、どこがまちがっていたのかということへの答は明らかです。しかし、ここで示された答を実現する上で障害となる存在があると憂慮されます。そのひとつは韓国における軍の存在であり、もうひとつはアメリカと日本の動きであります。

アメリカは、軍事的な観点から一〇月二六日以後の韓国における反動化と全斗煥体制を黙認して来たといえます。朝鮮半島における北に対する軍事的な力の維持ということを考え、そのためには韓国の政権の安定を第一にし、軍によって韓国を間接管理しようというのが、ペンタゴンの基本的な考えであるようです。極東の現状が変らなければいいというのが、近年百年間のアメリカの一貫した態度であります。たとえば日本が朝鮮を植民地化した時の、有名な一九〇五年の桂・タフト秘密条約があります。アメリカがフィリピンを支配する、その代り日本の朝鮮支配を認めるという協定です。その年の秋、日本は乙巳保護条約を結んで朝鮮の外交権を奪ってしまします。

政治犯家族たちは、いま……

アジアの語学講座で去年から韓国語の受講者が減ったところもあるという。光州事態が影響したのである。理由は全く逆なのだが、心ある人々は光州を訪問することを自制している。光州市民に迷惑がかかることを惧れるからである。状況はさらにきびしいと私もきいていた。親友が逮捕されたときいて面会に駆けつけた日本人は会うことができず空戻りをさせられたとか、外国に留学す



光州をたずねて

る前にひと目入獄中の親に会いたいと何度足を運んでも許可がおりず涙のうちに出発したということもあるというようなことは数えればきりがない。反政府の指導者とレッテルを貼れば少しの容赦も、血も涙もない。釈放も真の釈放ではない。青年は復学も就職の道も閉ざされる。連座制だから家族も束縛される。見馴れない客などは警察やCIAの目を光らしめるばかりだ。

私は光州に行く前、具体的なことについて想像力が働かず漠然とした警戒心があった。つまり本質が掴めていなかった。そのためにいまでも残念に思うことがある。急行セマウル号で隣りに乗り合わせた娘さんと何でもよい話せばよかった。彼女は光州が故郷だといっていた。ああ勿体ないことをしたと思う。むやみに私の中でブレイキが掛っていた。いよいよ光州へいくという緊張のときだったから仕方がないといま自分を慰めている。戒厳令は解かれたとはいえ、やはり光州の市民生活は油断もスキもない。その当時の凍った道路のようなものであった。

しかし驚いたことに日常の私の周囲では見られない、生き生きとした表情の人たちに出会った。その人たちは監視の中のはりつめた状況の中で運動をしている。罪の軽重を問わず、全員釈放を、学生は復学を、そして復権を、この三つの目標が達成されるよう協力して行動している。刷り物とか、手紙、写真などあとに残るものは一切用いないで口から口、手から手、人間から人間への運動である。あの惨劇の日から半年の間は息をひそめていたが、無実の拘束者を救い出さねば、という切なる思いが光州市民の間に広がっていった。それが初めて表面にあらわれたのは二月十九日のプラカード事件である。霊光の原子炉起工式に出席した全大統領が光州に泊った日のことである。全は光州市民が歓迎したとPRしたかったのだが、道庁前の広場に「収拾学生、市民」のゼッケンをつけた人びとは全の車をとり囲み、ある者は車の屋根にとび乗り、「全員釈放せよ」と書いたプラカードを掲げたのである。そのあと逮捕され拷問を受けた女性もいたが、その「全員釈放」

の声はひそかに深く絶えずひびいている。ある人はその実現までは一食を抜いてもとの決意でたたかっている。それは例えば拘束者に下着を一枚差し入れるような、ささやかな形にしかならないが、受けとった人はその下着一枚にこめられた意味をからだ中で理解する。一家の働き手も奪われた家族はたちまち食物にもこと欠くありさまで、四人の子供を抱えて発狂した母親もいる。金大中氏と結んだと見做された鄭東年氏は死刑を求刑され、鄭東年氏と結んだと見做された三六〇人は内乱陰謀、騒乱、戒厳令違反などの罪に付された。「内政干渉は言い逃れに過ぎません、隣人の苦しみを黙視するのは人間としての罪です」と日本政府の態度を批判する声が高い。「留守家族の救援活動に協力して下さい」「日本の心ある人びとの協力で感謝します。しかしときに利用されている感じもします。真実の運動であってほしい」「私たちは単なる反政府運動をしているのではありません、誤った庇護のもとに置かれることに抵抗しているのです。世界中の声を同じくする人びとと連帯することによって国際世論が日米の対韓政策を変えることを願っています」直接にきいた留守家族や市民の人々の声が私の耳の中で鳴りひびいて止まない。(会員S・I)

家族たちの訴え

韓国の冬はなお続く

金大中氏内乱陰謀事件の家族たち
金大中氏らいわゆる内乱陰謀罪で各地の矯正所にちりぢりに送られている拘束者家族の消息は、キリスト教関係者などを通して伝えられている。拘束者家族たち一同の名で発表される各種声明文の署名者となっているのは、年長の文益煥牧師夫人朴容吉さん。三月はじめには、「各地の刑務所での面会を終えた家族たちの話によれば、零下一五度をこす独房での暮しに、暖房もなく、大部分の

母と子の墓



わたしはあなたの子をみごもっていたのに……
金準泰「ああ、光州」より

被告たちは凍傷に苦しんでいる。せめて水筒と寝袋のさし入れを認め、暖いお湯を入れた水筒で暖をとれるようにし、他の罪囚たちと同じ待遇をしてほしい。矯正所を政治報復の場としないでくれ」と、悲痛な訴えを出している。しかし、これらの被告家族の中でも、金大中氏夫人だけは一切、他の家族と連絡も出来ないよう隔離されているという。

光州事件被告の家族たち

三月三十一日、光州事件の鄭東年被告たち三人の死刑判決が大法院判決によって確定した。残る人々も無期、あるいは六七才の老弁護士への二〇年の有期刑など実質的な無期刑ともいえる重刑は、一、二審と何ら変わらないままであった。昨年末以来これらの被告の家族たちは、くり返して、彼らが全く無実であることを訴えて来たが、この判決に接して、ソウルのカトリック明洞聖堂でハンストに入っていると伝えられる。

「光州事態の責任は明らかに、市民ではなく、殺りくをほしいままにした戒厳令当局にある。それにもかかわらず、被告たちは、ひどい拷問によって偽わりの自白を強要され、

犯人にでつちあげられた。予備検束されて事態をみることもすらできなかつた学生が主謀者とされて死刑囚となり、事態の収拾にあつた法曹人や神父、教授、市民たちが死の恐怖にさらされている。私たちを助けて下さい」と、一月に伝えられた長文のメッセージの中で、光州事件の家族たちは訴えている。

日本人への呼びかけ

昨年末、渡韓した親しい日本人に金大中氏事件の被告家族の一人である八〇才をこえた母親がこう語ったという、「日帝時代、私の義父がそして夫が獄に捕えられ、あるいは満州の地に亡命するなど苦しみを味わつた。息子の親友は、日本の刑務所で殺された。今、また息子が獄中であり、金大中氏が殺されようとしている。この苦しみもまた日本がさせているのではないか。もし、金大中さんが殺されるようなことがあつたら、私は日本に火をつけに行きますよ」と。これは七十年の生涯をキリスト者としてすごして来た篤信の老婦人の日本人へのことばである。「無実」を叫ぶ光州事件の被告家族たちは日本をどうみているだろうか。すでに光州の死者たちの家族からは日本のマスコミの一部にみられる無責任な報道への憤りが聞かれたという。

光州事態の経緯

'79	'80	'81
10・26 ●KCIA部長全載圭、朴正熙を射殺。崔圭夏、大統領代行となる	10・27 ●保安司令部の全斗煥、合同捜査本部長に就任。満州道を除く、全土に非常戒厳令宣布	1・24 ●日本政府は二の判決を評価に値するとし、田種敷遺族を解放対韓関係の正常化を進めることを表明
11・24 ●ソウル一〇〇〇余名が反政府集会	5・18 ●戒厳司令部、午前零時を期して戒厳令を全国に拡大。金大中や高銀をはじめ二十六名を逮捕。連行。光州の市民、学生五〇〇〇余名、戒厳令の解除を要求して街頭デモ	8・14 ●金大中、高銀をはじめとする二十四名に対する憲法會議第一回公開審問開始
12・12 ●戒厳司令部、申錫勳内閣発足	5・17 ●戒厳司令部、梨花女子大八賢官隊一〇〇〇名を急派。会議中の学生代表を相次いで逮捕	5・23 ●市内外で戒厳軍と市民軍対峙
5・1 ●ソウル、大田で学生が校外デモ	5・15 ●各地で街頭デモ。十万余名参加	5・27 ●戒厳司令部、学生十六名を含む二十一名を指名手配
5・2 ●学生デモ、各地に拡大。以後連日各大学デモが行なわれる	5・19 ●光州の市民、学生五〇〇〇余名、戒厳令の解除を要求して街頭デモ	5・22 ●市内外で戒厳軍と市民軍対峙
5・1 ●ソウル、大田で学生が校外デモ	5・21 ●光州のデモ、二十万市民の武装蜂起に発展。全羅南道各地に波及	5・23 ●市内外で戒厳軍と市民軍対峙
5・1 ●ソウル、大田で学生が校外デモ	5・22 ●市内外で戒厳軍と市民軍対峙	5・27 ●戒厳司令部、市内に入入、学生市民を制圧
5・1 ●ソウル、大田で学生が校外デモ	5・23 ●市内外で戒厳軍と市民軍対峙	6・5 ●戒厳司令部、学生十六名を含む二十一名を指名手配
5・1 ●ソウル、大田で学生が校外デモ	5・24 ●戒厳司令部、市内に入入、学生市民を制圧	8・14 ●金大中、高銀をはじめとする二十四名に対する憲法會議第一回公開審問開始
5・1 ●ソウル、大田で学生が校外デモ	10・27 ●保安司令部の全斗煥、合同捜査本部長に就任。満州道を除く、全土に非常戒厳令宣布	1・24 ●日本政府は二の判決を評価に値するとし、田種敷遺族を解放対韓関係の正常化を進めることを表明

労働者の母

李小仙さんたちは今も闘う

—清溪被服労組籠城事件—

韓国の女子労働者は、勇気ある闘いをしてきた。しかし、今、労働運動は危機的な状況にある。機関誌第三号でとりあげた李小仙さんも、捕われ、行方が知れない。

インフレと不況に悩む韓国政府は、昨年春より労資協調路線を強力におしすすめ、労働運動を弾圧している。魔の手は、ついに韓国労働運動のメッカともいえる清溪被服労組までのびた。

清溪被服労組は、一九七〇年一月平和市場の路上で、「労働者の酷使をやめよ」と抗議して焼身自殺した全泰老の志をついで結成された。

二万余の組合員を中心になつていのが、全泰老の母である李小仙さん。息子の死まではごく平凡な母であつた彼女は、「私が成しとげられなかつたことを、お母さんが必ず成しとげて下さい。」という全泰老の言葉を胸に、清溪労組を足場として労働教室を開き、デモの先頭に立ち、幾度も投獄にもめげず、文字どおり

「労働者の母」として一二年間、若い組合員とともに闘ってきた。ところが、一九八一年一月二六日、この労組は明らかな理由なく解散を命ぜられた。つづいて、二二日零時に、関係当局は労組の事務所を閉鎖して、一千万ウォンの預金を含めた資金と帳簿、器具の一切を押収し、

労組幹部たちを自宅軟禁した。組合員の作業場は、数百名の機動警察による監視下におかれた。

八方ふさがりになつた李小仙さんや組合員二三名は、窮余の策として自分たちの状況を全世界に知らせるために、三〇日午後四時頃、アジア・アフリカ自由労働機構(AAFLI)の韓国事務所を訪れ、訪韓中のAAFLI執行委員長に面会を要求した。これが拒絶されると、彼らは

バリケードを築き、準備してきた十萬の石油を床にまいて籠城にはいり、国内、国外にいる友人に、我々の孤独な戦いを知らせる戦いの場として、AAFLIの事務所を貸して

— 声明文 —

解散命令を撤回せよ

労働者の正当な権利は保障されねばならない。いかなる物理的弾圧の手段によつても、労働者の権利を曲げることはできない。

最近、当局は民主的な労働組合幹部を職場から追い出し、純化教育に送っている。特に、全泰老同志の焼身自殺を契機に建てられた清溪被服労働組合を、ソウル特別市長の名義による「労働組合法三二条により、労働委員会承認を受け、即時解散を命ず」という公文で、解散命令を下した。一月二二日、労組事務室と労働教室を機動隊数百名に急襲させ

くれ」と声明書の中で切々と訴えた。警察は現場を包囲して解放をもとめたが、それに応じないと見ると夜十二時頃、機動隊三〇〇名を投入した。全泰老の弟、全泰三(支部長)と申光鋪(非常任支部長)は三階から飛び下り、全氏は警察の網にかかったが、申氏は背骨が粉々になるという重傷を負った。

警察に連行された二三名のうち、女子組合員十二名は五日後に釈放されたが、李小仙、全泰三氏など十一名は、今だに拘束されている。

た行為は、不法なやり方であり、労働組合の自律性を害ない、労働者の権利をふみにじる非人間的な暴力行為である。また、労働関係法を一方的に改悪するのは、反民主的な行為である。

清溪被服労組は、一日一四—一六時間を一〇時間に短縮し、毎年、賃金を最低生活費に基づいて引き上げ、一〇人以上の事業体に退職金支給制度を設け、中二階を撤去し、換気装置を設置する等、多くの労働条件を改善してきた。また、各種の教育文化事業を通して労働者の意識化、医

半島商事の戦い

清溪労組の戦いのしばらく前に起つた労組への弾圧の例は、楽喜財閥系の繊維・被服産業である半島商事労組の組合員逮捕である。

昨年五月の戒厳令拡大に先立って半島の組合員は、会社側の組合つぶしの策略のため半数以下に減つていった。戒厳令に力を得た会社側は、これを機会に労働運動を根だやしにしようとして、残つた四〇〇人の労働組合員の親もとに手紙を送り、「お父さんが、厄介な人間とつきあつていて」と脅かした。そのため多くの親が、ソウルに出て来て子どもを説得しようとした。

会社はさらに十人の労働者をクビにしようとしたが、この件で開かれた労使交渉の席で社長が女子組合員を殴つてケガをさせたという事件が生じたため、会社側はやむなく提案を引っこめ、謝罪した。

八〇年十一月、全国繊維労組は半島労組の前組合委員長チャン・ヒョングジャ(張賢子)と現委員長チョ・カムブン(趙琴粉音訳)に電話して、二人に辞任を命令した。二人が拒絶すると、繊維労組は彼女たちを除名した。会社側はこれにならつて二人

療の実施などばかり、賃金を受けることができずにさまよつていた労働者の賃金を受けとれるようにした例も、数十億(ウォン)にのぼつて

いる。労組解散のニュースだけを聞いても事業主たちは「今は労組がなくなつたから、思い通りに働かせられる。お前たち、うろろろするな」等と公言し、労働者へのしめつけを強めはじめた。

民主化の第一歩は国民の大多数をしめる労働者の権利を保障すること



息子の死を嘆く李小仙さん

である。福祉国家建設の礎は、労働者の人間らしい生が実現されることである。労働者の権利は保障されねばならず、民主的な労働組合を保護育成しなければならぬ。

清溪被服労働組合を解散させてはならないし、また解散することはできない。

ソウル市は解散命令を直ちに撤回し、清溪被服労組を現状回復させよ！労働悪法を撤廃し、労働権を保障せよ！

清溪被服労働組合組合員一同

韓国の女性解放

七〇年代の女性解放理論もしくは女性解放の思想は、日本でもそうだったように、韓国でも、一九七五年の国際婦人年をひとつのきっかけとして、一般の関心を集め、論壇に登場するようになった。そのひとつとして、ここに、一九七九年夏号の雑誌「創作と批評」に掲載された座談会「今日の女性問題と女性解放」の内容を要約、紹介する。この座談会の出席者は、李効再（梨花女子大社会学科教授）、李昌淑（前韓国日報記者）、金幸子（梨花女子大政治学助教授）、徐廷美（聖心女子大仏文科講師）の四人の女性、司会役でただ一人の男性は同誌の編集委員で文芸評論家の白桑晴氏である。

■歴史をふりかえる

一九七五年のメキシコにおける国際婦人年大会に関心をよせた韓国の女性が多かったが、その中でも、この人々は、メキシコでの第三世界の女性たちの発言に共感し、関心をよせている。第三世界の女性たちは植民地からの独立——民族解放のために男も女もともに闘った経験を持ち、今も、新植民地化との戦い、近代化工業化が急速に進む中で女性の解放を求めている。韓国の女性にとっても、これはひとつでないということであろう。

こうした問題意識で、過去の歴史をみる時、彼女たちは独立運動に参加した女性たちの中にある二つのタ

る結論は、独立運動は、歴史の表面にあらわれた何人かの有名な人々によつてだけではなく、もつと多くの名もなく死んで行った人々、労働者や農民たちによつて成しとげられたこと、そして、それらの無名の人々の中に多くの女性があったという歴史認識である。

抗日闘争を戦った輝やかしい女性運動の系譜が、解放後の女性運動に正当に引きつがれることなく、解放後の女性運動の主導権をとつたのは、むしろ、日帝治下における親日派の婦人たちであつたとの指摘もある。ある人はこれを、女性運動だけではなく、今日の韓国的状況なのだとも嘆いてもいる。

民族解放運動の支え手であつた多くの無名の女たちを含む運動が、正当に今日に引きつがれるならば、それは、今日の韓国社会の状況、とりわけ分断の状況を克服するものとなるであろうと李効再さんは強調している。

■中産階級化脱け出す道を！

参加者たちの問題意識の中には、女性運動が中産階級の主婦を中心としたものになりがちであり、彼女たちが自分たちの個人的な幸福を追求することに終って、勤労女性たちの切実な訴えをとりあげるに至らないことへの不満がある。

その一方、中産層の女性であつても、女性であるがゆえに受ける抑圧は勤労階級の女性の問題と共通したものがあつて、真の女性運動はその両者を含むものでなければならぬという意見もあり、また、銀行の女子行員たちの結婚退職制度撤廃を求める運動や、公開採用試験に女子も受験させよという運動を通して、労働者としての自覚にたつ工場労働者たちと中産階級の女性の連帯ができるとの期待も語られる。

中産層の女性には中産層の男性との関係のゆえに、自分たちの受けている抑圧を明らかに理解できないという傾向がある。しかし、底辺の働く女性にもつと別の視点をもつことができる。工場労働者として働く女性たちは、集団の利益というところを知り、不平等と抑圧の現象を全面的に修正しようとする、そのことによつて社会全体における不平等を是正する動きにつながるのではないかと、う見方にたち、女性労働者こそ女性解放の前進的な地位をしめるべきだという徐廷美さんのような主張もある。

る。このことによつて、女性運動の限界が乗りこえられるであろうとの示唆に富んだ提言である。

■家長制度の抑圧

輸出産業の中心を占め、高度成長の担い手である女子労働者が、低賃金と劣悪な労働条件に苦しむ理由のひとつは、職場内で、人間として生きる権利を主張するようになった彼女たちといえども、なお、私的な生活の分野では結婚に夢を托し、男女の平等を主張するまでに至らないからだと指摘もある。

七〇年代の韓国での女性運動のひとつ

とつのは、家族法改正の問題であつた。(註②)出席者のひとり李効再さんが笑いながら紹介するエピソードは、汎女性家族法改定推進委員会のメンバーたちが、国会議員たちに圧力をかけるために、出かけて行った時に、「戸主制度をなくすと共産主義社会になってしまうのではなか、アカの社会になることだ」と断言した議員がいたことで、「それでは戸主制度のないアメリカはやはりアカの国ですか」と反論すればよかつたのに、呆れ果ててことばも出なかつたのが、後になってみるとしゃくにさわるといふ体験である。

しかし、李さんは、こうした経験からも、女性のための制度の変革は分断時代の克服と結びつくものだ

いうことを、かえつて確信する。

彼女はいふ、女性は人間として、自分ひとりの生の主人であるだけではなく、自分の住む社会、自分の属する民族史の主人だという意識をもたなければならぬ。

■分断を克服する女性運動

分断の時代にあつて、女性たちは、その被害者のようにみられがちであつた。しかし、社会生活のあらゆる分野で統一にむかう意志を集約し、表現する努力をしてゆかねばならぬ。そのためには女性の発言が必要だといふのである。

具体的には、家族法の改正運動や女子労働者の運動もみな、統一社会をきざぐため女性の権利獲得運動の一部であると李効再さんはいふ。

「統一された社会は、だれかがだれかを搾取し、抑圧する社会となつてはならないのです。だから、私たちの民族がすべて、自由と平等と愛を享受して生きることができるようこの分断時代の中でも、望ましい統一社会の土台となる制度的な基礎をひとつひとつ築いていかなければなりません。その意味で女性団体がまず、家長的な法制度を改正しようという努力をつけ、また経済的な不平等をとり除こうという運動をつづけて行けば、それがそのまま統一後の社会にも民族共同体の底にある

ものとして継承されてゆくでしょうし、またそのような努力自体が、統一に向かう私たちの意志をいつそう堅くしてくれると思います」と。

女性運動は統一にむかう民衆運動であり、真の民族運動に一致するものだといふのが、彼女の結論である。

註① 金マリヤ（一八九三—一九四四）東京留学中独立運動に参加、帰国して三一独立運動に参加、大韓民国愛国婦人協会会長となる。後上海に亡命。

南慈賢（ナム・ジャヒョン 一八七二—一九三三）慶尚南道生れ。義兵戦争で夫を失ふ。一人息子を育てたが、夫の仇を討つため三一独立運動に参加、満州で独立軍に加わり、斎藤実総督暗殺計画に加わつたが果せず、一九三三年武蔵信義を暗殺した

資料紹介

上記の座談会のほか、韓国の女性解放運動の現況について知るための資料として、梨花女子大の「女性資源開発研究所」から一九七六年研究シリーズのひとつとして発刊された「韓国女性の地位」（李効再、金周淑編著）は、統計や法律、年表などを中心に、女性の政治、経済活動への参加、法的地位、教育、団体活動などについてまとめたもので参考となる。また、李効再編「女性解放の理論と現実」（創作と批評社、一九七九）は、第一部西洋の女性解放運動

第二部第三世界の女性問題、第三部韓国女性運動の過去と未来の三部から成り、第三部では崔民之の「韓国女性運動小史」（邦訳・雑誌三千里23号）を冒頭に「女性運動と法」「今日の農村女性」「性と労働」「分断時代の女性問題」の五つの論文が収められている。

梨花女子大の「女性学」の教科書として編集されたものにも参考になる点が多い。しかし「対話」や「創作と批評」「シアレンリ」等の雑誌が廃刊になり、学園へのしめつけがきびしくなつた今後の動きが案じられる。

（まとめ・山下、山口）

女性が支える農村

韓国の女性人口のうち約30%を占める農村女性の現状はどのようなものだろうか。一昨年秋、韓国でほぼ同時に出版された「女性解放の理論と実践」(創作と批評社)、「女性学」(梨花女子大学出版部)の中から(今日の農村女性)李知恩、及び(韓国の農村女性)金周淑の両論文を以下要約して紹介する。

農村の経済構造

一九六二年以降、輸出指向型の工業化を目ざして海外依存による高度成長政策を推し進めてきた韓国は、そのメカニズムの持つ必然的な結果として国内農業と農村の相対的な犠牲をもたらした。この高度成長政策によって農村に与えられた唯一の役割は、低賃金労働を支える安い農産物の供給源として、また都市の低賃金労働市場を潤す剰余労働力の排出源としてのものであった。七〇年代になるとそれまでの農業政策の立ち遅れ、行きづまりの対応策として「セマウル運動」(新しい村づくり)が政府の主導のもとに展開されはじめた。基本的に「生産増大・所得増大」を狙ったこの運動は、高米価政策と米

必要な栄養摂取、衛生的な居住環境、家事労働負担の緩和、真の農民俗文化等を可能にするにはあまりにも不十分な水準なのである。

農村女性の労働と余暇

工業重視の経済政策は年々多数の離農者を生み出している。一九六五年から一九七四年までの間に農家人口は二百三十五万人も減少した。都市に流れていったこれらの人々は主に生産年齢層に集中しており、そのため農村の労働力は急激に減少している。農機具の購入が困難な大多数の農家では減少した労働力を女性たちの労働増加によって補わなければならない。農村労働時間中、男子労働時間と女子労働時間の構成比の推移を見ると一九六七年には男子71・9%、女子28・1%の比率であったのが、一九七五年には男子66・6%、女子33・4%となっていて農業労働の負担が急速に男から女へと移っているのがわかる。

また、農村女性たちは農業生産労働の担当者であるばかりでなく、地域社会開発事業の積極的な参加者でもある。70年代に始まった「セマウル運動」は、農村女性たちの広範な参加と積極的な労働員を必要とするものであった。農村女性たちはセマウル共同作業によって下水道修理、塀づくり、村の道路工事、セマウル

彼女らの貴重な余暇を浪費してしまうのである。それによって農村の共同体的な文化、そして共同体的な喜びや余暇までも徐々に無くなりかけている。

農村女性と健康

農村女性たちは何よりもまず激しい農作業のために体を壊す。原始的

すには手遅れだったという。妊娠をして月に一回きちんと医師の定期診察を受けることなど、農村の女性たちにとっては困難なことなのである。また彼女たちの9割は家で出産する。この中にはたった一人で出産する産婦も少なくない。出産後の養生も十分にはとれない。カトリック医大の調査によれば、一週間の最も多く(48・2%)2〜3日が20%、出産後少しも休まずに家事労働をしたという女性も6%であった。これは農村労働力の不足によって、産後の休養期間が昔よりもかえって短かくなったことを表わしている。

以上のような農村女性たちの健康状態をさらに不利にしているのが、農村地方における医療施設の決定的な不足である。韓国の病院はその57%が都市に集中しており、医療施設のない村が30%にのぼる。医師のいる所でも頻繁な医師の入れ替わり、誠意不足、古い医療器具等の原因によって農民たちの疾病予防と治療に十分な効力を発揮しえないでいる。

農村社会と女性問題の解決

韓国の農村を長い間支配してきた儒教文化は、最近多少変わりつつあるがその影響はまだ根深い。農村女性たちは過去の生活様式や思考方式から脱皮できないまま、非合理的な伝統に左右され、民主主義思想

(表1) 耕作規模別農家戸数の構成比

	合計	0.1ha未満	0.1~0.5	0.5~1.0	1.0~1.5	1.5~2.0	2.0~3.0	3.0ha以上
1976	100.0	0.2	30.6	36.5	18.6	7.8	4.7	1.5
1977	100.0	0.2	31.2	36.3	18.6	7.8	4.6	1.4
1978	100.0	—	29.4	37.3	19.3	8.0	4.5	1.4

(表2) 農村女性の労働・余暇時間

活動	時間	農繁期	農閑期	平均	都市主婦
労働		12:53	9:47	11:20	9:37
余暇		3:03	4:43	3:53	6:03
休息		8:04	9:30	8:37	8:20

な農具を使いながらの重労働を明け方から晩まで、農繁期には一日の休みもなしに続けている。食生活は麦飯から白飯に変わったものの、おかずは昔も今も変わらない。ある報告によれば農村女性の約70%が貧血症にかかっており、10人中3人は医師の治療をすぐに必要とする病気を患っているという。

この他に農村女性たちの健康を害する原因としては、不良な飲料水、下水道施設の不備、便所、公衆浴場施設の不備などを挙げることができ。また、年々増加する農薬使用による公害の拡散も農村女性を含めた全ての農民たちの健康に危険をもたらしている。農薬を使用する女性のうち32・7%が頭痛、吐き気、呼吸困難、四肢の痛み等を伴った中毒症状を訴えている。

残留毒性、猛毒性農薬の生産を認めている現在の政策や、根本的には多量の農薬使用に依存する作業方法が改善されない限り、農薬による健康破壊は徐々に深刻になることが予想される。

農村女性の健康にとって妊娠と出産をとりまく母子保健の環境も重要な問題である。

ある資料によると、病院に来る妊婦中44%は妊娠7カ月が過ぎて来たために、すでに発生した合併症を直



(まとも・山下)



6月2日全電通会館で

「お母さん、デモに出かける私を叱らないで下さい。私たちができなかったら、だれがデモをするでしょうか。私はまだ世間知らずだと思えます。しかし、国家と民族のための道はわかっていません。私の学友はみな死を覚悟して出かけたのです。私は命を捧げて闘うつもりです。デモの途中で死んでも悔いはありません。お母さん、私を愛するお気持ちから、ずいぶん悲しくお思いでしょうが、すべての同胞の将来と民族の解放のために喜んで下さい。」

かつて、四・一九革命で銃弾にたおれたソウルの年若い女子学生陳英淑（チン・ヨンスク）さんは、こんな遺書を書き残していました。それから二十年、光州で散った数百人の若者たちは、きつと、この女子学生と同じように死を覚悟して闘ったに

違いありません。自由を求め、民主主義を願って、やむにやまれぬ気持ちで武器をとった学生たちの顔は、不思議な輝きと威厳に満ちていました。テレビに映るその表情を見ながら、死をも恐れぬ勇気と、人間としての美しさに、私たちは深く心を動かされたのです。

「先頭に立ってたおれたリーダーたちの純粋さに打たれました」と光州のある女教師は書いています。私たちは、まず、彼らに心からの敬意を

光州市民に 連帯する



アジアの女 たちの会から

表わし、その闘いを全面的に支持します。

そして、私たちは、軍隊によって殺害された犠牲者全員に、深い哀悼の気持ちを表わしたいと思います。血を流したのは、学生たちだけではありませんでした。女性も、いたいけな子どもも、お年寄りも、無残に殺されたのでした。子どもを抱いた母親に発砲して、母子もろとも殺したり、足を撃たれて呻いている女性や老人のこめかみに銃口をあてて射殺

したり、女子学生の衣服をはぎとって乳房をえぐりとり、あまりのむごたらしい仕打ちに思わず兵士につかみかかった七十歳のおばあさんをその場で刺し殺したり、妊婦のおなかを銃剣でつき刺して胎児をえぐり出したり……すべて、実際に目撃した人々からのなまなましい報告だけに、戦りつを覚えます。

しかも、多くの犠牲者たちの亡きがらは、軍隊によって運び出され焼き捨てられたとも聞きますが、一面に

並べられた何十というひつぎに収められてはいないかと、わが子の、夫の姿を探し歩く母たち、妻たちの「アイゴー」という悲痛な叫びが、私たちの胸をさし貫きます。

ある国の軍隊が、自国民をこれほどまで残酷に殺りくした例は、歴史にもそうザラにはありません。私たちは虐殺の張本人である全斗煥をはじめ、あの十八年にわたる暴虐な朴維新体制の残党たちに、万感の恨みと憤りをこめて抗議します。そし

て、残虐きわまりない独裁政権を軍事援助で支え続け、光州で民衆が立ち上ると、韓国軍が虐殺に出動することを支持した米国政府に私たちは激しい怒りを向け、きびしく糾弾します。また、経済援助で朴政権を支持し、朴なき朴体制の温存に躍起となつて、民主化を切望する韓国の民衆に敵対した日本政府をあらゆる方法で告発したいと思えます。

私たちは、どんな武力で抑えつけられても、韓国の民衆の中に渦巻く不屈の抵抗精神は再び噴出して、血にまみれた政権を必ずや打ち倒すことを信じて疑いません。その勝利の日には、歴史に輝く光州の闘いに命を捧げた犠牲者一人一人の魂がよみがえり、牢獄につながれている良心の囚人たちは残らず自由になり、光州で流された涙をぬぐって、解放の喜びにひたることでしょう。その日が、一日も早く来るように、私たち日本の女性も力を振りしぼってがんばる決意を表明します。

一九八〇年六月二日



札 幌

一月二十三日韓国大法院は金大中氏に「上告棄却」死刑判決を言い渡しました。さらにそのすぐ一時間後には、閣僚会議で「減刑無期」を決定しました。全斗煥政権はついに金大中氏を殺せなかつた！私たちの闘いによって金大中氏を殺させなかつた、これは大きな成果です。でも、私たちは喜ぶことよりは、怒りのほうが大きかったのです。金大中氏を裁くということは、五月の光州民衆の決起を裁くということです。自由と正義、民主、統一を叫んで殺されても立ちあがり、闘った光州民衆を、虐殺の張本人である全斗煥政権が裁くことは、断じて許されません。そして、「減刑無期」措置は、金大中氏の政治生命抹殺に他なりません。南民線事件二被告への死刑確定、光州事件被告への死刑判決など、全斗煥政権の民衆弾圧は続いています。全政治犯釈放をかちとらなければなりません。

私たちは、金大中氏救出運動の中で、日本政府の責任を明らかにして来ましたが、これは、これからさらに追及しなければなりません。光州民衆が立ちあがったとき、日本外務省は「日本進出企業の警備強

化を徹底せよ」とすぐに全斗煥政府に申し入れ、全斗煥軍政の虐殺行為を支持し、その後も全斗煥大統領就任には特命大使を派遣、金大中氏への「死刑判決」には「憂慮」という形で、一貫して韓国民衆弾圧に加担して来たことは許されません。減刑無期」措置が決まるとすぐ、一九〇億の円借款、チームスピリット81への参加、日韓定期閣僚会議の再開など、米日韓軍事体制強化、経済侵略、性侵略を強化しています。

金大中氏ら全政治犯の自由をかちとる闘いを共に創り出しましょう！

韓国・アジア・第三世界民衆と共に生きる道を選びとりましょう！

仙 台

80年はずいぶんいろいろなことがあった年でした。アジアの女たちの会・札幌もこれまでの蓄積を基盤にして、というか、まとまり切らない「基盤」をひきつけて、外に飛び出ざるを得ない状態だっと思えます。そして、目いっぱい動きまわった。その結果、その分だけ責任が重く

なつたような気がします。フィリピンの人々との出会い、光州決起の感動は、これからの私たちが何を指すか、という意味でも決して忘れられないことになるでしょう。そしてこの過程で実感としてとらえられた日米韓政府の抑圧・支配構造、それに対する怒りもまた忘れることができませぬ。

先日、バラオの独立の模様をテレビで見ました。スペイン・日本・アメリカ等に侵略されて三百年、その三百年の抑圧をはねのけて「非核太平洋人民憲章」を高くかかげて独立したのです。その憲章は、日本をも含み込む非核太平洋地帯を宣言しています。

私たちは昨年、フィリピン・韓国・バラオの心ある人々から呼びかけられました。まだまだ聞こえてこない多くの声があるでしょう。私たちは、日本をとらえかえし、自分をとらえかえし、自分たちから出会いを求めて出かねければならないと思えます。（札幌だよりNo.9より抜粋）

がら、報告しなければなりません。ですからこの報告は、かなり個人的な感想といったものとならざるを得ないことをご承知下さい。

仙台での金大中氏救出運動は、街頭での署名活動、集会、韓国総領事

館（仙台）への抗議デモなど、昨夏からかなり盛り上りをみせて聞われて来ました。八〇年十一月末から十二月初めにかけては、複数の市民グループと民主化を闘う少数の在日韓国人との共同で連日、集会デモが行われ、一日のうちに総領事館前に二度のデモが行われる等の状況もうまれました。私達会員（女性史を学ぶ会）としては、十二月十二日「金大中氏、在日韓国人政治犯救援コンサート」クナリオンドラにスライド「倒れた者への祈祷」上映をもってさやかな支援をいたしました。

ただ、全国的な状況を反映しているともいえるのですが、各々がそれぞれの主張をにかけて運動するといった形であり、「金大中氏救出」での運動の連帯といったことは十分に

東京

「韓国の軍の力は非常に大きく、ソウルの春」がそのまま続くとは思えない——八革党処刑五周年集会（八〇年四月・アジアの女たちの会主催）での前田康博記者の発言に、私は戒厳令の解除を要求する学生たちや、大統領選挙への動きをある怖れをもって注目していた。五月十六日、日本では衆議院が急に解散にな

に行われていない様でした。特に街頭署名では何種類もがあちこちで行われ、市民に混乱したイメージを与えたようです。これは運動としては非常にマイナスです。すべて統一してやらねばとは必ずしも思いませんが、何らかの方法を考えねば一般市民への説得力ある運動にはならないと思われました。

大中氏の問題は決して終わっていない」とは誰もが口にするのですが……。日韓連帯とは何なのか。今こそ真剣に考えていかねばならない時だと考えます。日本の政府が「経済協力」の名で韓国民衆の生活を破壊し、日韓両政府、資本家が利権に群がっている現実をどうするのか。日韓民衆の連帯を考える時、在日韓国人の人々とうかがわって行くのか。日本人が過去に犯してきた歴史を考えれば、韓国と北朝鮮、在日の韓国人、朝鮮人が直面している問題こそ真剣にうけとめねばなりません。アジアの解放のために真の連帯を作り上げていくことが、今、私達に問われていることだと思います。



（中嶋あつ子・金順烈）

リテンテコ舞い。ちようどそのドサクサに合わせたかのように、韓国では事態はどんどん進んでしまった。テレビで見ると光州、現地を見た人のなまなましい話。前田記者の心配は現実になってしまった。

がある。光州から世界に向けたメッセージに心をゆさぶられる思いであった。金大中氏が逮捕され、全く向う側のテンポで、邪魔者は殺せ、の筋骨は進められ、押し止めるすべはないかに思われた。十一月末、和田春樹氏が「助かる見込みは三％になりました」と言われた時には息がつまる気がした。私達の思いとは逆の日本の政財界の動き、いま私に出来ることはデモに行くことだ。年寄りもそれなりに役に立てるだろうと。

市民署名運動のデモは、全コース声を出し放しだ。ウリ・スンニ、ハリラ（我らは勝利する）を歌い、「全政治犯を釈放しろ」と叫ぶ。寒風に向かって金大中さんの写真パネルを両手で高く掲げて歩く髪の毛の長い少女、気合いの入ったシブプレビコールの青年、おなじみの赤いジャン

パー姿のおばさま……。「今日もまた一緒に歩きましょう」といった感じで北風のなか二百人も集まってくる。囚われの人々を思い、その家族たちを思い、心を熱くし、祈りをこめて歌い、歩く。どうか日韓不信の関係を改められ、民衆の連帯が出来ますように。私たちは歩きながら一つになれることを知った。

我々の責任でもある。韓国の民主化のため「せめて邪魔をしないで」という訴えを重く受けとめ、これからの活動こそ困難でもあり、肝腎なのだ。私は七四年のキーセン観光反対の会で鄭敬謨氏が、「韓国民衆が民主化を求め反日運動をした時に同じ側に立てるか、今から覚悟を決めて下さい」と言われたことを思い出す。

分の中にも、「大変な状況のなかにある韓国人々を助けてあげたい。痛みを分かち合いたい」という気持ちがあることに気づかれます。そして私達の運動も、韓国民衆との共感を原点に持ちつつもなお、お助け的なところがあるように感じます。「韓国問題」という時、実は日本のあり方が問われているのだということを、強く言い続けなければならぬといつも感じるのである。

円の援助を決めました。それを待っていたかのように、同日五時に八革党への判決が出され、翌朝早くも八人が処刑されてしまいました。この事実が日本と韓国が常に利用しあう関係であることを示しています。このようなあり方が、日本政府や企業の経済侵略ばかりでなく、性的侵略をしている日本人を作り出しているのです。

私たちの叫び、祈りがどこに届いたかは知らない。最悪の事態だけは免れたとはいえ、何ひとつ解決されていない。日本政府のすることはま

あす二月二十八日には、光州の三人を殺すな」という外務省へのデモがある。

金大中氏拉致事件の後で、韓国では「民青学連事件」という大弾圧があり、背後操縦者として「人民革命党」がデッチあげられました。彼らは六五年韓日条約反対運動で捕えられ、その時は、起訴されずに釈放されましたが、再び捕えられ、前回と同じ検事によって、政府転覆を企てたとして死刑が求刑されました。当時朴政権は、経済危機を迎え、労働者、民衆の不満がう積しており、その反映として、学生、知識人の民主化の闘いが激化していました。日本政府や進出企業も危機感を持ち、

韓日両国民衆の、真の共同闘争にされた日本政府と日本人の姿を今こそしっかりと見据え、そこから問い返すことが急務です。「一九七二・三・一 日本民衆への提案」の中で金芝河は次のように言っています。

神奈川

「金大中氏死刑判決、直後に無期懲役への減刑」という日米韓政府による見えすいた演出以後急激に「正常化」への道が進められています。金大中氏は依然として囚われの身であり、民主化をめざした人々が沈黙を強いられる今また、強圧政治が韓国民衆の上のしかかっています。

街頭で署名を集めている時、多くの方が話しかけてきます。「とっても大変ですね。韓国は民度が低いから民主主義が育たないんですよ」といふなど真顔で言う人に出会うと、戸惑いを感じます。そういう人に対しては、「そうではない」ともつともらしく説明します。けれどもそういう自



（谷 民子）

奈良

「買春」ととらえて活動する「ア

アジアの女たち」。「売春」としかとらえられない人々の間であがいていた私にとって、まさにこれだ!!だったのです。昨夏の合宿でたかさんの

（高城たか）

女たちとめぐりあって、半分宿題がふえたような気と、私たちをめぐる動きのテンポの速さ、その阻止に走り廻らざるをえない状況の中で、ガンバル女たちの怒りとすばらしさを改めて知った想いでした。

隣人韓国の金大中氏救出活動、奈良では天理大学生が第一審開始日から無期限ハンストに立ちあがったことへの連帯と、私自身の意志表示として、青年二人とともに三日間ハンストをしました。団地という生活の場で芝生の上にもよこんとすわって、小さなハンスト宣言を足元に置いて始めたんですが、署名用紙を置く机をかきつけて来てくれる人、テントをかかえて来てくれる人、夜になると「金大中氏を救おう」と書いたあんどんを持って来てくれる人、シュプレヒコールも決意表明もないけれど、少しづつ一緒にすわりこんでくれる人がふえたんです。一日目は何ごとかと素通りした隣人も次の日には立ちどまって署名とカンパを黙ってしてくれる。早朝通勤のかけ足を止めて署名してくれた人……周囲では最初、反撥があるんじゃないかと心配したのですが、隣人たちの金大中氏救出への想いの拡がりや韓国と同じ方向へ進みつつある日本の現状への不安等々、隣人たちの反応は、その心配を一掃してしまいました。

大法院判決前に、数人の友人によびかけて、金大中氏を救おうのポスターをつくって、団地のペランダや庭の垣根にはって、意志表示しよう——と十数枚作ったまではよかったです。二〇名位声をかけて、結局はれたのは、わずか四名、選挙のポスターはつてくれる人もダメだったんです。ショックでした。比較的市民権のある「金大中氏を救おう」でダメなら、「天皇制異議あり」はもちろん「戦争反対」もむずかしいんじゃないか、弾圧を意識し始めると、まず自己規制が先行するのかもしれないなあ、とは思いつつ、えらいこつちや、ここまで追いつめられてんのか、えらいこつちや。

戦争がまずくるのではなく、まず弾圧がある——とよく言われますが、その通りみたいですね。組織等のいわゆる全体での意志表示だけで物事をかたづけしていると、とても勝ち目はなさそうです。一人一人がはつきりと、めんどろがらず、恐れず、意志表示を続けることの大切さを最近特に感じます。

(市原みちえ)

西ドイツから

昨秋、西ドイツで富山妙子さんの

光州事件をテーマにしたスライド(「倒れた者への祈祷」)を上映する機会がいく度あった。

まず八〇年九月末西ベルリンで一週間にわたって女性学とは何か、さまざまな面から探るために開かれた「女の夏期大学」の飛び入りプログラムの一つとして。このスライド上映が光州事件の経過を知らせるきっかけとなるだけでなく、女と芸術と政治についての突っ込んだ話合いの糸口になれば、との期待もあったが、それには至らなかった。参加者は韓国人五人、ドイツ人七人。

次に、西ベルリンの「女のための情報・教育・研究センター」で上映(機関誌九号参照)。三回目は西ベルリン在住韓国人女性グループの集りで、看護婦(西ドイツで看護婦として働く韓国人女性の数は約六千人)学生など約十人が集り、一人の会員の家でスライド上映。集った女たちに大きな感動を与えたようだ。十一月には在独韓国人団体の主催で金大中氏救出のための大きな集会や、女性グループのセミナーが予定されており、その会場でもこのスライドを是非上映したいということになった(その後、このスライドは彼女たちが買いあげてくれたと聞いた)。

次は十月二十六日ケルンで行なわれた「南朝鮮トリビュナル(模擬法

廷)で。午後一時から六時まで「光州事件」金大中氏に対する死刑判決「警察国家と政治犯」「新植民地主義」「北からの脅迫」などの分科会、夜は七時から十時まで韓国の軍事独裁政権の実状を明らかにする模擬裁判が行なわれたが、夜の部で金芝河の詩の朗読などと共にスライドを上映。参加者は約八十人。集会の呼びかけ人は、エコロジの視点から政治に取り組み「緑の党」やアムネスティ・ケルン支部の人たち。その後、この日に結成された金大中氏救出委員会が中心となって、十二月五日にはデモ(参加約八百人)また署名集め(数万人分)も行なわれた。十二月十九日には西ドイツ政府に、韓国への特別大使の派遣を要請。今年一月二三日には重ねて、韓国人将校の西ドイツ軍隊内での養成を含む独韓軍事関係の停止、外交措置などを含めて政府の金大中氏救出に対する積極的行動を要請した。五月には「韓国人権問題」会議も予定しているという。

西ドイツのフェミニスト雑誌「クラーヂュ」にもこのスライドが四ページにわたって紹介され、多くの女たちに韓国の実状を訴え、また女であることと、芸術・政治との関りを考えるきっかけを与えたのではないかと思う。(寺崎あきこ)

韓国を知るための本 およみになりましたか？

最近、韓国についての本は多い。その中で、韓国の状況を知り、学ぶとき参考になると思われるものを、私たちのみた範囲で紹介する。

韓国からの声を聞くために、何よりも「軍政と受難―第四韓国通信」TK生(岩波新書三八〇円)をあげたい。韓国の一人の知識人からの通信という形で雑誌「世界」に連載されたものの七七年十一月〜八〇年七月までの分をまとめたもの。現在獄中にある人々の思想を伝えるものとして「民主救国の道―講演と論文一九七三―一九八〇」金大中(新教出版社・一、八〇〇円)「無窮花よ、永遠―」金大中(傑アンヴィエル、一、二〇〇円)「抗日民族論」白基琿(柘植書房・一、八〇〇円)があり、この人々を含む韓国の論説の紹介としては雑誌「創作と批評」掲載の論文を集めた「分断時代の民族文化」(社会思想社・二、二〇〇円)同じく雑誌「対話」からの論文集「韓国民衆の道」(三一書房・二、〇〇〇円)、ガリラヤ教会説教集「主イエスよ、来り給え」(新教出版社・八五〇円)等がある。パンフレットとしては「金大中裁判資料集」(金大中氏らを

殺すな市民署名運動・三五〇円)が出ている。

光州事件についてのドキュメントとしては、「光州民衆の決起」(アジア太平洋資料センター・七五〇円)「光州事件写真集」(韓国問題キリスト者緊急会議・四五〇円)、「光州八〇年五月」猪狩章他(すずさわ書店・一、二〇〇円)等がある。「光州事態の真相」(カトリック正義と平和協議会・五〇〇円)は小冊子であるが、ひとりの教会関係者のみだドキュメント「引き裂かれた旗」などが収められている。

これらの背景ともいうべき民主化運動の流れを、もう少し長い期間にわたってみるための資料としては、「ソウルからの報告・ドキュメント 韓国一九七六―一九八〇」前田康博(ダイヤモンド社・九八〇円)、「韓国民主化闘争資料集一九七三―一九七六」韓国問題キリスト者緊急会議(一、六〇〇円)「夜の沈黙に自由の鐘を」中川信夫編(現代史出版会・一、三〇〇円)、「沈黙に抗して」徐龍達他編(筑摩書房・一、三〇〇円)などがあり、前田氏の著書以外の二冊は宣言文等の資料を集めたもの。

韓国側の動きと、日本の側での運動を対比させたものに「日韓連帯の思想と行動」青地・和田編(現代評論社・一、八〇〇円)がある。

七〇年代の韓国の女性労働者の運動を描いた「火花よ、この闇を照らせ」金一哲(新教出版社・一、三〇〇円)は感動的な書。全泰志と李小仙母子をとりあげた「炎よ、わたしを包め」金英瑛(たいまつ社・一、三〇〇円)もある。「韓国労働運動史」金潤煥・中尾美知子訳(柘植書房・一、八〇〇円)はそれらの歴史的背景を示す。

韓国の歴史・経済、文化についての本は多いが、民主化闘争の精神的指導者ともいえる成錫憲氏の著「苦難の韓国民衆史」金学鉉訳(新教出版社・二、八〇〇円)は、単なる歴史書というよりも、思想を語る書として印象深い。手短かな概説としては「朝鮮史」梶村秀樹(講談社新書・三九〇円)がある。「韓国四月革命」(柘植書房・一、三〇〇円)絶版となっており、訳には多少問題もあるが「韓国女性運動史」丁堯燮・柳沢七郎訳(高麗書林)もあげたい。

文学として「朝鮮の抵抗文学」金学鉉編訳(柘植書房・二、〇〇〇円)近刊の「荒野に呼ぶ声」金学鉉(柘植書房・二、三〇〇円)がある。金芝河の作品は、「苦行」、「不帰」が何

れも中央公論社から出ている。文庫では、「わが魂を解き放せ」「獄中から」「良心宣言」が大月書店の国民文庫版で出ている。韓国の現代小説の訳も、尹興吉「黄昏の家」(東京新聞出版局・一、三〇〇円)など、ぼつぼつ出はじめている。

韓国経済の背景については「韓国の経済」隅谷三喜男(岩波新書)他がある。国際的な朝鮮問題への視野を示す本に「朝鮮はどうなっているか」マコーミック、セルデン編(三一書房・二、五〇〇円)「傷ついた龍」リンゼー(未来社・二、〇〇〇円)がある。日本人、在日韓国人の著として、「韓国民衆をみつめること」と和田春樹(創樹社・一、七〇〇円)、「岐路に立つ韓国」鄭敬護(未来社・一、六〇〇円)、「日韓連帯への道」桑原重夫(ユニウス社・一、五〇〇円)など。「朝をみることなく」徐兄弟の母呉已順さんの生涯(呉已順さん追悼文集刑行委員会。一、三〇〇円)は、祖国を幼くして離れ、二人の子を政治犯として獄中に送った韓国女性が、日本のことばで、祖国への熱い思いを語った感動深い書。

その他の本について梶村秀樹編「朝鮮現代史の手引」(勤草書房・一九〇〇円)が参考になるが、残念なことには、最近のものについての紹介は少ない。(A・Y)

買春観光反対

東南アジアの女性たちも

ASEAN諸国訪問の鈴木首相に抗議行動

「ウエルカム・ゼンコー・スズキ」の看板が並び、日の丸がはためくマニラの町で、買春観光抗議集会が開かれた。一月八日、鈴木首相が到着した一時間後の午後二時。会場のセントポール女子大講堂は、ホテルなどの立ち並ぶツーリスト・ベルトと呼ばれるマニラ二地区にあり、斜め向かいのラマダホテルは、日本人観光客が団体で練り込んで、ホスピタリティガールと泊まるので知られている。周囲には、彼女たちの所属するクラブやアパートも多く、まさに、マニラの買春観光地帯のド真ん中にあつた。

「セックスツアーに抗議するフォーラム(公開討論会)」とはり紙のある区間に近づくと、ジーブヤトラックの警官隊が会場を囲んでいるのでハッとした。千人入れる講堂はだんだん埋まり、主催者が最低二百人は集まってほしいと少し余分に三百部用意したという資料はもうなくなつて

「セックスツアーに抗議するフォーラム(公開討論会)」とはり紙のある区間に近づくと、ジーブヤトラックの警官隊が会場を囲んでいるのでハッとした。千人入れる講堂はだんだん埋まり、主催者が最低二百人は集まってほしいと少し余分に三百部用意したという資料はもうなくなつて

いた。参加者には、しゃれた制服の女子大生も多かったが、さまざまな年齢層の一般女性や修道女などにまじって学生や報道関係の男性の姿も目についた。

まず、ミタ・タベラ女史が壇上に立った。貧しい農民の健康を守る運動をしてきた銀髪、長身の女医さんだ。「保健活動も買春観光も、貧困との闘いという点でつながっている」と持ち前の行動力でこの集会の推進役となった。一語一語怒りをこめるように、鈴木首相あての抗議文を読みあげた。「友好国日本というイメージは、日本人男性観光客がアジアに

集団買春に来て、女性たちを侮辱していることとそこなわれている。今なおうずいている第二次大戦の傷をいやそうという努力も台無しになつてしまふ。日本人が、軍服の代りにビジネススーツでアジアを支配して、アジアの人々の人権を踏みにじっている。鈴木首相は、セックスツアー

を中止するための有効な措置をただちにとってほしい」

タベラ女史は、さらに、この日の朝、電報で届いたばかりのタイの女性グループからの闘争を支持する旨の力強いメッセージを披露した。つづいて、尼僧姿のシスター・ソルが立った。「買春観光は性的帝国主義であり、アジア全体の問題だ。日本がアジアと平和で友好的な関係を保とうと思うなら、セックスツアーをやめるべきだ」といつもの激的な調子でぶち上げたあと、買春観光でもうけるのは、結局日本側であることなども非難した。

このあと、元上院議員で法律家のテクラ・シガ女史が、穏やかな口調で、買春観光の全体像を報告、「ただちにやめさせるべきだ」と結んだ。「恥」という字を「ご存じですか」(日本基督教婦人矯風会制作)のスライドも上映され、買春観光が韓国、台湾、フィリピン、タイなどアジア全



フォーラムでの発言者たち

域に拡がっている様子をナマナマしく伝えた。つづいて昨年一月二十九日、東京で開かれたアジアの女性たちの会主催の「80買春観光に反対する集会」とデモの様子がスライドで紹介され、日本の女性たちの買春観光反対の闘いに大きな拍手が湧いた。また、アジアの女性たちの会、フィリピン問題協議会、矯風会、NCC婦人委員会からのメッセージも読み上げられ「買春観光をなくすために、社会経済構造を変える闘いと女性解放の闘いを結びつけて進めたい」、経済政治構造の下での性の搾取、人間

に対する冒瀆である買春観光に抗議するアジアの人々の闘いを支持する」など、買春観光を送り出している国の女性としての決意を伝えた。

後半は、タベラ、ソル、シガ三女性にキリスト教学生運動代表と、ホテルレストラン労組代表の二人の男性も加わってパネル討論が行われた。「日本は何もかもわが国に輸出してくる。公害やデカダンス(退廃)まで。セックスツアーは、日本など外国支配に対する全面的な闘争の一環として取り組むべきだ」と、学生代表が発言すれば、労組代表の青年は「日本の労働者たちが買春観光に



るが、日本の労働運動はこの問題はどう考えているのか」と痛烈な問いかけをした。会場からも、恥を知らない日本人への怒りの発言が「アジア各国の女性グループが横の連帯をとって共同闘争をしよう」などの提案もあつて、大きな拍手の中で集会は終わった。

翌日のマニラの各新聞は、一斉に、社説やコラムやマンガで、鈴木首相の訪問とからめてセックスツアーの問題をとりあげ、「スズキさん、どうするつもり」と問うていた。

次の訪問国インドネシアでは、記者会見で地元の男性記者からズバリ質問された。鈴木首相は自国民の不始末を指摘されて顔をしかめながら「業者への行政指導を強めたい」と苦しそうに答えた。

最後の訪問国タイでも、鈴木首相は、買春観光反対の「歓迎」を受けた。一月十九日朝、女性、人権関係七つの団体の百余人がバンコクの

日本大使館前で抗議集会を開いた。タイ語、英語、日本語で「ストップ・セックスツアー」「性侵略反対」などと書いたプラカードが人目を引き、日本人男性観光客を風刺した寸劇まで披露したあと、鈴木首相あての抗議文を大使館に持ち込んだ。フィリピン同様、タイでも、警察のきびしい監視のもとで行われた抗議行動であつた。

マニラやバンコクでの買春観光反対の動きは、地元や日本のマスコミだけでなく、台湾、韓国から遠くスウェーデンや米国などの新聞でも報道され、日本人男性の醜い行動に対してアジア各国の女性が立ち上がり始めたことが世界中に知れ渡つた。七三年、韓国女性のキーセン観光反対の訴えに答えて立ち上つて以来、八年目にととうとう買春観光反対が世界の世論になり始めた、という意味で、鈴木首相のASEAN(東南アジア諸国連合)訪問の旅は歴史に残るのではないだろうか。(松井やより)

好評発売中!

日本と 後藤 均平
アジアの 人びと

アジアという鏡に映し出された近代日本の貌とは。その醜悪さから眼をそらさず、日本とアジアのかかわりを問い直す中から、真の友好と連帯の道をさし示す。解放戦争の勝利にまで至るベトナム民衆の闘いを描く「ベトナムの歴史」を併録した好個の歴史読本。

すくらむ社
東京都港区三田3-2-9 大山ビル
☎452-4249 郵便東京 3-69805

韓国問題専門誌 (隔月)

シアレヒム (一粒の力)

創刊号1981. 5. 17発行予定
10号分 ¥4,000 (送料共)

振替・東京1-78071 シアレヒム社
問合せ先・東京都渋谷区渋谷2-9-2丸三青山ビル6F
シアレヒム社 TEL03-498-4020 鄭敬謨

傷ついた龍

一作曲家の人生と作品についての対話

天才的作曲家・尹伊桑の朝鮮での幼少年時代
日本での抵抗運動、芸術家としての目覚め、
作曲活動、拉致事件などを対話で語る
尹伊桑/ルイーゼ・リンザー 伊藤成彦訳
四六判上製/1,800円
未来社 東京都豊島区駒込1-3-15 振替・東京7-87385

女たちは戦争への道を許さない

―集会でのアピール―

八〇年十二月七日、「女たちは戦争への道を許さない」集会が、東京山手教会で開かれました。十代から八十代までさまざまな年齢層、職業をもった女たち、子づれの主婦、学生たちなど千三百人余り、会場は超満員、年の瀬のせまる夕ぐれ、渋谷駅周辺は女たちのデモでうずまきまじりました。動員された人々ではなく、ひとりひとりの女たちが日本の軍国主義化、帝国主義侵略の再現を恐れ、怒り集ま



ったのです。当日の集会で、私たちは「アジアの女たちの会」は次のようなアピールをしました。

三〇〇万の日本人が犠牲となったあの侵略戦争の悲惨なことは、いくら語られても語られつくすことにはないと思います。だが、自らの被害者としての苦しみを強調するあまり、女たちが銃後を護ったその銃口が、どこにも向けられていたのちに、私たちは気づかないできたのではないかと国防婦人会、愛国婦人会などに組織された戦争中の女たちがたすきがけで日の丸をふって送り出した夫や息子たちは、アジアの戦場で何をしていたのか。私たちには知らされていなくても、二千万近くの人々が殺されるという被害を受けたアジアの人々は、日本軍の蛮行を骨のズイまで恨み続け、決して忘れてはいません。「焼きつくし、奪いつくし、殺しつくす」残虐きわまりない三光作戦、慰安婦として朝鮮女性、アジアの女性を戦場にかり出した日本軍、戦争の傷跡は今なお、アジアの各地に生

々しく残っています。

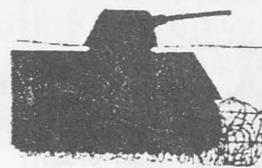
敗戦から30年たった今日、日本は経済大国としてアジアに君臨し、かつて軍事力で果たせなかった「大東亜共栄圏」の夢を、円の力で事実上つくりあげています。かつて、日本軍が侵略したアジアの国々に、今は日本は工場を林立させ、利益をむさぼる。その利益による円高に誘われた日本人は観光客として札束を手に、アジアの地をかつ歩し、買春観光に血眼になっています。

そして、防衛庁はこうした在留邦人―経済侵略、性侵略の尖兵としての日本人―救出のためと称して、自衛隊の海外派遣さえ検討中だという。また、海上輸送路の確保が叫ば

れ海外の日系企業の防衛が公然と語られています。

私たちは二度と戦争の被害者になりたくない。そして、同時に、戦争に加担して再びアジアの人々への加害者になることも拒否し、戦争への道に共に反対して闘います。

一九八〇年十二月七日
アジアの女たちの会



ひろば

私はかなり恵まれた少女時代を「過ごし、良き妻になり賢い母になることを夢みて美しいもの、優いもの、清らかなものばかりへの接触を望み、それを至上の宝としていました。スライド「蜚語」(富山妙子作)の意味するものに心を深く揺さぶられ、遅まきながら私の中に何かの変化を感じました。ヨーロッパに憧れていた私にとつてアジアの人々への関心は皆無といつても良い程でした。金大中氏拉致事件等も遠い国のことでした。戦争は悪いことと漠然とは思っていてもそれ以上のものではありませんでした。「侵略戦争であった過去の戦争を振り返り、二度繰返さない為の運

動をし続けること」との富山氏の言葉から私に「アジアの女たちの会」への参加の日が訪れました。機関誌や「女大学」によって学び、私も一粒の麦として「白でひいてはならない種」として生きなければいけないことを痛感しています。軍靴の足音は確実に近づいてきます。元号・建国記念日・教育そして徴兵制・武器輸出、更に憲法改悪と次々に戦争への道へと布石されるのを見ますと、正直いって不安と恐怖をも感じてしまうのです。出来ることなら、何もしないで、花を愛し、鳥の歌声を聴き、小さな自分の幸せだけを守って……なんて弱気を起すこともありませんが、「この運動は正しいことなのだ! この闘いをして行くのは正しいことなのだ!」と何かが私に囁き続けます。

こんな小さな迷いを書きましたのも、心の中で思いつつも参加したり行動なさらない方、一人であるといつ弱音をはいってしまう方に呼びかけ、正しい怒りを結集して運動に連なりたいと思ったからです。

「一人来て 群集となりし原爆忌」私の好きな俳句の一つです。(H・S)

大学でほそぼそながら女性解放を考える集まりが続いています。それにしては大学で同じように学んでいる同世代の人達が女性解放にあまりにも無関心なのは、いつもがっかりさせられます。とくに男性は、歴史など勉強して差別される者の側に立とうと意識している人でさえそうなのです。また女性の中には自分は無知な女性とは違うのだから差別して貰いたくないという人もいます。まだまだ道ははるかに遠く、自分の生活の場で自分出来ることを地道に続けていかなければと思っ

(T・K)

活動報告

(81年1月～3月)

- 1・8 マニラで買春観光抗議集会 (五島昌子、松井やより参加)
- 1・21 女大学 暮らしの中のアジア 第4回「なぜ世界の半分が飢えるのか」川田侃氏
- 1・26 韓国を考える集い―金大中裁判に連座した人々とその妻たち、母たち「詩人高銀と民族文学」金学鉉氏
- 1・31 世話人会 2回にわたって今年
- 2・14 年の活動の方向を徹底討論
- 2・18 女大学同第5回「お魚とアジア」山鹿順子氏
- 2・28 東南アジアの家族計画の映画を見る
- 3・14-15 世話人会兼高里鈴代さん 歓送会箱根しらゆり荘で
- 3・18 女大学同第6回「紙と森林」藤原英司氏
- 3・28 読書会「なぜ世界の半分が飢えるのか」内海愛子

買春問題もそうですが、私はアジアを制覇してゆく味の素にやりきれない憤りを感じます。昨春、インドネシアを旅した21日間に、およそ二百人以上の人と味の素の話をしました。その人達は魚の粉だとか蛇の粉

* * *

朝を見ることなく

徐兄弟の母 呉己順さんの生涯

オモニは「今では私たちみんなの肉となり血となつてともに生きておられます。しかし、最期に医師先生が「朝まで辛抱すれば楽になりますよ」と言われた時オモニは「朝まで……しんどいな……」とおっしゃってそのまま朝を見ることなく逝かれたのです。お待ちにならなかつたのですか? 朝まで…… 朝まで…… 徐勝

定価 1,200円
編集発行 呉己順さん追悼文集刊行委員会
京都市下京区仏光寺通堀川西入 西村誠気付
振替 京都42838「徐君兄弟を救う会」

だとか思わされてしまっている様でした。ラジオやTVからアジノモトの歌が流れ、誰も抗するすべもなく、90%の人が使用していると思われ、祖先からの食文化をズタズタに分断し味覚を犯す味の素の弊害を広く知らせたいと痛感しました。

私は短大で「女性論」の講義をし、学生と共にささやかな研究会を続けております。卒業生のほとんどが企業に勤めますので、在学中にしっかりと女性観、社会観等を身につけるようにと考えています。(K・H)

* * *

(Y・I)

'81春期 女大学日程

- 第7回 4月15日(水) 6:30~9:00
「第三世界を襲う粉ミルク禍」 松井やより
- 第8回 5月20日(水) 6:30~9:00
「アジアの味を変える味の素」 塚本由美
- 第9回 6月17日(水) 6:30~9:00
「家族計画とピル—
アジアでの日本の役割」 飯島愛子
- 第10回 7月15日(水) 6:30~9:00
「日本の化粧品とアジアの女性たち」 戸田杏子
- 会場：渋谷勤労福祉会館 500円(会員300円)

アジアの女たちの会 '81夏の合宿

- と き 8月29日(土)~31日(月) 2泊3日
と ころ 伊豆・天城山荘(修善寺からバス30分)
テ-マ 「アジアとの連帯をどうつくるか」
定 員 60人(会員に限る)子連れ可
参加費 1泊5000円
申込み 7月末までハガキで五島宛に

五回目の合宿です。樹林に囲まれた伊豆の高原で、全国の会員が年一度の出会いを楽しみましょう。

入会のおさそい

第1号「韓国民権闘争の女たち」を出してから4年、今年、10号もまた韓国特集にしました。私たちにとっても、韓国の女たちにとっても春はまだ遠い——。韓国の政治「犯」の家族の「私たちだけがいつまで苦しまなければならないのでしょうか」という悲痛な叫びに私たちはどう答えられるのか、10号の編集をしながら胸をしめつけられます。

機関誌をお読みになった方々、ぜひ、ご批判、ご感想をお寄せ下さい。アジアに、また女性解放に関心のある方は、仲間として「会」に加わって下さい。

会費・年間 2,000円
申し込みは振替・東京 0-46143
アジアの女たちの会へ。

編集後記

「アジアの女たちの会」でとりくんで来た買春の問題、政治犯の問題、女子労働者の人権の問題、公害進出の問題、そのどれをおいても韓国の女性たちの戦いがあつた。七九年春、私たちは東一紡織の女子労働者たちの戦いを劇として上演し、また昨年四月には「人革党」処刑五周年の追悼集会を開いた。こうした経験をを通して、私たちひとりひとりにとって、韓国は身

近な存在となつて来た。八〇年五月以来、この一年光州事件の集会や、金大中氏を殺すな!のデモや署名運動に私たちが参加させたものは、こうした具体的な経験であつた。今号の機関誌はそのような経験の上になつて、さらにまた、「女たちの会」の二日の集会の成果をふまえて「光州一周年」を記念して発行する。政治犯とその家族、職場を追われた労働者たち、編集をすすめるながら胸痛むことが多かつた。

A・Y

和 田 春 樹 (好評最新刊)
韓 国 民 衆 を
みつめること

金大中拉致事件以来、一貫して抵抗的市民運動の渦中を歩いて来た著者が、近・現代の日本と韓国との関係史を根源的に洗い直し、主として歴史と文学者に思いをひそめた、時務の書。

●「週刊朝日」他諸紙誌絶賛!
四五判上製 300頁 1700円

東京都文京区湯島2-2-1
電話 03-6151333112
創樹社

自由光州
16mmカラ-25分
1980年5月 幻燈社・火種プロ作品

映画

音楽・高橋悠治
絵・富山妙子
朗読・伊藤惣一
監督・前田勝弘

プリントの販売・貸出しを行なっています
販売価格 200,000円 貸出し料金10,000円

幻燈社 東京都新宿区西新宿8-19-1
TEL03-365-1927 〒160
火種プロ 東京都世田谷区桜丘4-16-2
TEL03-425-6095 〒156